
ルーイン・ストーン

コーヒー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルーン・ストーン

【Nコード】

N2588C

【作者名】

コピー

【あらすじ】

ブラックリベラルと闇組織に恐れられている、何でも屋のアルスとキル。一件の依頼から彼らの運命は大きく変わるようになる。ルーン・ストーンをめくり、人類の滅亡を賭けた戦いが今、始まるうとしていた。

第一章 ブラックリベラル

「グレイダール地方でモンスターによって民間人三人死亡…か。最近モンスターの出現がおおいですね、アルスさん」

「そうだな。近頃のモンスターは知能も高ければ魔力も強い。厄介な相手だ…」

アルスと言われた青年はタバコを吸いながらそう言った。

ここは、リューズベルと呼ばれる星のあるアルディア地方の都市。静けさの残る裏路地にひっそり佇む《ドリーム》という喫茶店のカウンターに二人は座っていた。

タバコを吸っている全身黒で統一された服装の男が、アルス・ガンドーレル。22歳。

一方アルスの横に腰掛けているアルディア情報誌に目を通して、いる少年は、キル・グリーン。18歳。アルスより一回り小さい身長と体格だ。

「それにしても、暇ですねえ。依頼が来ないと」

キルは情報誌を閉じると、机に寝そべった。

「俺としては早くツケを払って貰いたいんだかなあ…キル」

カウンター越しに立っていたちよつと怖そうな人物が皮肉たつぷりにそう言い、キルもアハハ…と笑った。

この男は喫茶店のマスター、カーフ。顔の割に性格は温厚で二人の良き理解者だ。

「心配すんなよカーフ。その内であつかい仕事に来て店ごと建て替えてやるよ」

アルスの自慢気な顔にカーフは、いつになつたらそのであつかい仕事に来るんだよっ！と心の中で叫び溜息を出した。

アルスとキルは二年前にコンビを組んだ。

アルスが世界中を旅している時に、盗賊に殺されそうなところをアルスが助けてから一緒になったのだ。

一年間でキルはもともと持っていた魔法のセンスでみるみる強くなった。そこで二人は何でも屋を始めた。依頼は、主に闇組織からが多く、敵対組織の破壊や殺し等も引き受けたこともある。

その二人の強さと高い成功率で、闇組織からは《ブラックリベラル》と呼ばれ有名になった。

そんなブラックリベラルでも常に依頼が入ることは無かった。

「今日は仕事も入りそうにないし…帰るわ」

アルスは空になったコーヒーカップを置き、横に立て掛けてあった黒い剣を手を取った。キルも立ち上がり、また来ます。と言ってアルスの後に続いた。

カランカラン、と扉の鐘を鳴らし二人は外へ出た。外は既に暗くなっていたが、ビルのネオンや街灯で明るさを保っている。二人は宿へ向かうため、まだ人が大勢いる大通りを歩き始めた。

……その翌朝。

《ピリリリリリ》

アルスの携帯が音を鳴らし目を覚ます。

「…誰だよ、こんな朝っぱらから！」

時計を見る。時計の針は九時半を示していた。普通の人なら既に仕事をしている時間だが、この二人にはまだ睡眠時間だ。

「もしもし」

アルスは少し不機嫌そうに電話をとった。隣のベッドではキルがスヤスヤと寝ている。

「了解」

アルスは電話を切り、キルを起こす。

「キル！起きろ！」

「こんな朝早くから何ですか…？」

「久々の仕事だ。準備しろ！」

それを聞いたキルは一気に起き上がる。

「おお！ やつとききましたね！！」

にこやかに言うキルを見て、このいきなりのテンションの上げかたは凄いなっ、と改めて思うアルスであった。

二人は三十分で準備を済ませ、宿屋を後にした。

第一章 ブラックリベラル（後書き）

初めての投稿なので、読みづらい、分かりにくいという部分もあるかと思いますが、最後まで読んで頂きたいと思います。

第二章 バルパレス

アルディアの都市から少し離れた、ウルードという田舎町にある大きな研究所。そこに二人は来ていた。一般の研究所よりかは幾分でかい建物で、外見は研究所、と言うより金持ちの住む豪邸といった感じだ。この研究所はウエールズ研究所と行って、遺伝子研究で有名なところだ。しかし、裏では生物兵器の研究も行っている、という噂もある。

二人が入口の前へ足を運ぶと、中から短いスカートに白いシャツ、といったスーツ姿の女性が出て来た。

「お待ちしております。私は社長の秘書のミナnda、と申します。さあ、こちらへどうぞ。」

ミナndaに誘導されるまま中へ入る。建物内も研究所という感じは一切ない。高級ホテル…と言ったほうがいいだろう。ミナndaはVIPルームと書いてある扉の前で足を止め、ノックをする。

「社長。ブラックリベラルが到着されました。」

「…入れ」

ミナndaは扉を開け、どうぞ、と手で促す。中は高級絨毯じゅうたんが一面に敷かれ、フカフカのソファアが置いてある。

ソファアの置いてある前には、高そうなスーツに身を包んだ四十代の男が足を組み座っていた。アルスとキルは堂々と向かいのソファアに腰を下ろす。

「あんたが依頼人かい？」

「そうだ。私がこの研究所の社長、グラハムと言う。それにしても驚いた。あの有名なブラックリベラルがこんな若い二人だとは…。」

「そりゃどうも。それより、依頼内容が聞きたいね！」

「フフフ…、ではそうしよう。」

アルスの挑発的な態度に、グラハムは笑みを浮かべた。

「依頼というのは、君達に奪ってほしい物があるんだ。」

「奪ってほしい物…それは何ですか？」

キルが尋ねる。

「中身は言えんが、黒い小さめのケース…。それを持ってきてほしい。」

グラハムは手でケースの大きさを表す。アルスがそれを見てから質問する。

「それは何処にある？」

「バルパレスの支部。このあたりを管轄する五課に保管されている。」

「バルパレス！！」

キルが驚いた声を上げる。

バルパレスとは、リューズベルの真ん中に位置するヒルレイ地方に本部を構える大組織。

この星の全てのネットワーク管理、法の適用など様々なことを兼任している。ここが崩壊すれば全ての機能が停止する。まさにリューズベルの心臓、という所だ。そして、リューズベルの特別部隊が各地に一課から五課まで存在している。この特別部隊は、事件や、争い、救助といった事の対策として設立されているので、戦闘能力の高い部隊になっている。

「どうだ？ブラックリベラルなら容易い事であろう。」

キルは、どうするの？といった表情でアルスを見る。アルスは少し考えてから、

「わかった。引き受けよう。」

「そうか！なら」

「ただし、依頼料は一億貰う。それ以下は無しだ！」

アルスの言葉に耳を疑うグラハム。

「あなたになら安いもんだらう。バルパレスから奪うほどの物なんだから。」

「…わかった。払おう。」

「依頼成立だな！」

アルスとキルは立ち上がり、
「取り返したらまた来る」

と言つて、部屋を出ていった。

二人が出ていったのを確認すると、ミナンドが近寄る。

「いいのですか？社長。あんな奴らに一億なんて…。」

「いいのだよ、ミナンド。あれが一億で手に入るなら、あの方から更に高い報酬が貰える。それに…私も奴らに一億も払うつもりは無いからなあ。アツハツハツハー」

その一室で、グラハムの笑い声はいつまでも続いていた。

ウェールズ研究所を出たアルスとキルは元居た市街地を歩いていった。

「いいんですか、アルスさん？あんな依頼引き受けちゃつて。それにあの研究所は人体実験をしているつて噂もありますし…」

「まあ、あのオッサンを潰すのもいいかなあ…と思つてな！それに、バルパレスの部隊も見てみたいし。」

「それもそうですね。」

楽しそうなアルスにキルも笑顔になる。バルパレス部隊が相手でもなんとかなる、という考えがこの二人にはあるようだ。

「それで、どうします？一応五課の在る場所は知ってますけど…一応厳しくなると思いますし…」

「そうだな…。取り合えずは内部構造と保管場所を調べよう。局員に見つからないように…てのは無理な話だからな。スピード勝負で行こう。決行は今夜だ！」

それから日付も変わった午前二時。二人は五課の屋上に降り立った。

「カーフがヘリ持つてて良かったよ！じゃあキル！マップの表示。アルスの言葉にキルは小型の機械を出すと、慣れた手つきで操作

する。そして、あっという間に機械の画面にリアルなマップが表示される。

「今は屋上ですから…保管場所は近くですね！邪魔無く行ければ五分弱で着きます。それにしてもデカい建物ですね。内部も迷路ですよ！」

「まあバルパレス支部だからな。」

「でも、一番の技術力を持っている割にはセンサーしか付いてないようですね。」

「そりゃあ、侵入しようとするバカは俺らぐらいだろうからな。」

二人は屋上のドアの前まで移動する。

「じゃあここからスピード勝負だ！いくぞ！！」

ダアン

アルスが扉を蹴破ると同時に、けたたましい程のサイレンが鳴り響く。二人はそれも想定内というように全力で走り出した。

《侵入者有り、侵入者有り。全員直ちに持ち場へ着いて下さい》
その声に徐々に騒がしくなる内部。

「あゝあ、ついにバルパレスを敵にまわしちゃいましたね。」

「後で誤りに行くか！」

なんとも余裕のある会話をしている二人。結局、誰にも見つかることなく目的地の管理部屋に到着する。

「うん。四分四十七秒！計算通りですね。あとはこの扉を…ファイアーボール！」

そう言う手と手に火の玉サイズの炎が浮かび、それを投げつける。

ドォーン！バラバラバラ

「これでOKです。」

キルの言うように扉には人一人通れる程度の穴が空いていた。二人はそこから中に入り、ケースを探す。部屋の中の棚には色々な物が並んでいる。

「あつた！ありましたよアルスさん！これですよ！」

キルの手には小さめの黒いケースが握られていた。

「うん。間違いない。じゃあ逃げるぞ！」

黒いケースを持って、元来た道を走る　走る　走る　止まる！
前には五人の男性客。

「いたぞ！侵入者だあ」

男達はそう言うと、一斉に走ってくる！アルスはさっ、とポケットから卵大の大きさの玉を取り出し、男達の足元に投げつけた。その玉が弾けると辺り一面真っ白な煙が広がる。

「キル！こつちだ！」

少し戻り、右の通路に向かって走ると人のいない部屋に入り込んだ。

「キル。他に脱出できる場所は？」

「ここから一番近くですと…近くにある階段から一階まで降り、正面から出れます。」

「考えてる時間はない！それでいこう。」

そこから二人は出会っては逃げ、出会っては逃げてを繰り返し、なんとか正面から外に出ることができた。そこは広い駐車場になっており周りは塀で囲まれていたが、脱出出来ない程ではない。しかし、
「止まりなさい！」

その声により二人は急停止。アルスとキルに標準を向けたライトが次々に照らされ、辺りは明るくなる。そして前には二人の女性。

「最後に隊長さんのお出ましか…。それにしても女の人はね。」

キルより少し上ぐらいの年齢だろうか、若い美少女だった。

「あなた達…その中身が何か分かっているの？」

金髪の髪の長い女性が強い口調で尋ねる。

「俺達に中身は関係無い。心配しなくてもすぐに返す事になると思うから、見逃してくれないかなあ？」

今度は茶髪をツインテールにしている女性が口を開く。

「それは無理よ！とりあえずあなた達を逮捕します！」

二人の女性はそれぞれ武器を取り、構える。

「どうするんです？」

「少しばかり遊ぼうか！」

アルスとキルもそれぞれ構え、先に動いたのは女性の方だった。ツインテールの女性は少し大きめの片手タイプの銃を構えると、魔力を注入し、大きな玉のエネルギーとなるとそれを発動させる。一直線に飛んでくるエネルギーをアルスは刀身全てが黒く染まった珍しい剣を抜き、それを叩き斬る。すると玉状のエネルギーは弾かれるように消滅した。

「！！ あの剣、魔力が込められてる！」

それを見た金髪の女性も攻撃を仕掛ける。大剣を持つその女性は剣全体に魔力を込め、大きく振り下ろす。その魔力はレーザー状に放出される。それを今度は、キルが魔法の壁を作り防ぐ。

「さすがはバルパレス部隊の隊長さんですね。武器も高性能だし、魔力も強いや。」

「ああ。でもこのままやり合つと向こうも本気になりそうだからな。退散しよう！」

キルはコクン、と頷くと、アルスはまたもや玉を取り出した。

「悪いけど…俺らはこちら辺で退散させてもらう。」

そう言つて玉を投げ、煙が噴き出す。その煙が薄れてきた時には、二人の姿は無かった。

第二章 バルパレス（後書き）

いやあ…二章は書くのが難しかった！大分修正しましたが、やっぱりわかりにくかったかもしれない。特に戦闘に至っては全くだと思いません。もっと勉強します！ここで出てきた二人の女の子は最後まで出てくるキャラなので宜しくお願いします。

第三章 ルーイン・ストーン

あれから数時間後、日も上がり街に人が目立つようになった頃。アルスとキルはウェールズ研究所の会議室に座っていた。VIPルームと違い、質素な感じだが、広さは二倍以上はある。

しばらくすると、グラハムと三人のがたいのいい男。恐らくはボディガードだと思われる者と一緒に入ってきた。

「待たせたな。」

グラハムは正面に座る。

「奪って来たぜ！これだろ。」

アルスはグラハムにケースを渡した。

「おお！こんなに早く手に入れて来るとは！想像以上だよ。ブラックリベラルの諸君！」

と、少し興奮しながら話している。

「まあ、俺らにしてみれば思ったよりも簡単だったけどな！それより…約束の金だ。」

グラハムは、ニイツ、と口元を緩ませ

「そうだったな…。では、君達に報酬をあげよう！！」

グラハムがそう言うと同時に、二十人はいる男達が一斉に入ってきて、アルスとキルを囲み、武器を構える。すぐにでも殺す、といった感じだ。それを見たアルスは少し下を向いた。その顔は笑っているようにも見える。そして顔を上げると、

「こんな報酬は聞いていませんでしたけどね。」

と、グラハムを見る。

「ハッハッハッハ！君達はもう用済みなんですよ。馬鹿な連中ですねえ！この中身が何なのかも知らずにバルパレスから取って来るなんて。本当に」

「ルーイン・ストーン…だろ！？」

「！！！！！！」

アルスの意外な言葉に、グラムもキルも驚く。

「キサマ！知っていたのか！？」

「薄々な…。お前がなんの為に欲しがっているのかは知らないが、こうなる事は予想してたんでな！元々お前に渡すつもりは無い。」

グラムはみるみる顔を真っ赤にする。

「アルスさん！ルーイン・ストーンって、あのですか！！」

キルも少しは知っているようだ。

「ああ。神が落としたと言われる神秘的な石。今では、それを触ると死に至るって噂があるとか…。それで一応バルパレスも慌ててたんだろう。」

「それは本当の話なんでしょうか？」

首を傾げるキル。

「さあな。今の科学力じゃ誰も解らないだろうな。」

アルスが言い終えたその時、グラムが立ち上がった。

「まあそんな事はどうでもいい！状況をよく見てみる。お前達にはもう逃げ場は無い！ここで死ぬ運命なんだからな！！」

フン、と鼻をならすアルス。

「グラム。俺達を誰だと思っている？死ぬ運命にあるのはお前の方なんだよ。」

アルスはゆっくりと立ち上がる。不適な笑みを浮かべたまま……。

数分後

盛大な爆発と共に、街は騒がしくなる。

爆発の起こった場所はウェールズ研究所。既に五課の部隊が出勤しており、調査を進めていた。一つの部屋からは、グラムとその他数人の死体が見つかったのは言うまでもない。

「それで、この危険物どうします？」

アルディアの都市を歩いていたキルの手には、黒いケースが握られていた。

「五課に返すか…。俺たちが持っけていても仕方ない物だ。それに、今ならあの爆発で大半が出動してると思うしな。」

「そうですね。そうしましょうか！」

それで納得したキル。二人は侵入した五課を再び目指した。

しかし、キルは感じ取っていた。アルスの秀囲気がいつもと違うこと…。

第三章 ルーイン・ストーン（後書き）

ここまで読んでいただき本当にありがとうございます。ここで出て来ましたルーイン・ストーン。それが何かはもう少し先にわかります。次の話はアルスとキルではなく、五課の女性二人に変わります。それではどんどん更新していきたいと思えます。

第四章 二人の隊長

ウェールズ研究所が爆発してから、時間はもう夜になっていた。グラハムの死もニュースで流れたが、大半の人は別に驚きもしなかった。それ程、悪事を働いてきた男だったのだ。

そして、ウェールズ研究所から五課方面へ戻る車が一台走っていた。中に乗っているのは、アルス、キルと戦おうとしたあの女性二人。

運転している茶髪のツインテールの女性は

マイカ・ステイナー 二十歳。

一方、隣に座っている金髪を腰近くまで伸ばしている女性は

リーナ・フラック 同じく二十歳。二人とも、バルパレス部隊特有のスーツを着ている。スーツといっても、バルパレスの高い技術で開発された戦闘向きのスーツである。

まだ二十歳という年齢だが、高い魔力を持っており、一気に隊長クラスまで上り詰めた、いわゆるエリートである。それに、二人とも美少女ということもあり、バルパレス部隊でも一目置かれている。「あゝ、もう！昨日といい、今日といい、もう疲れたよ。」

「そうだね。色んな事が起こったからね。でも、マイカ。どう思う？この事件。」

リーナが少し深刻な顔で尋ねる。

「私は…、あの二人に関係あるように思えるんだけど。」

「うん、私も同じ…。グラハムはあの石を狙ってるって言われてたし、あの二人も、雇われてた感じだったし…。ひょっとしてあの二人、ブラックリベラル…？」

バルパレスでもブラックリベラルの噂は何度も耳にしていた。しかし、極悪組織の破壊や、指名手配犯の殺害などバルパレスにとっては有り難い存在だったので、捕まえる、という話が出てくることは無かった。

「私も、それならあの強さも分かる気がする。多分、五課でもう結果が出てると思うよ。顔が分かればそれなりの情報も出てくるから。」

それから間もなく、車は五課に到着し、正面ロビー前で車から降りる。それを見たのか、中からまだ幼い女の子が駆けだしてきた。

「マイカ隊長、リーナ隊長！クリスマス支部隊長が部屋まで来てくれて！」

十二、三才ぐらいの女の子は元気良く報告する。

「わかった。ありがとう、ミナ！」

マイカは頭を撫でると、ミナは嬉しそうに微笑んだ。そしてマイカとリーナは目を合わせると、五課の中へ歩き出した。

迷路みたいな広い内部を迷うことなく歩いていき一つの扉の前で止まる。コンコン、とノックしてから中へ入る。中では、一人の青年が立っていた。年齢はアルスと一緒ぐらいだろうか。

「クリスマス部長。話ってやつぱり……。」

「ああ。あの二人の事だ。とりあえず座って。」

三人はソファアへ座ると、クリスは話を続ける。

「まず話しときたいのが、三時間前にルーイン・ストーンのカースが入り口付近で発見された。」

「えー!!」

二人の声が重なる。

「ウエールズ研究所にも無かったし、多分、あの二人が置いたんだろうね。」

「あの二人の正体は……?」

リーナが尋ねる。

「多分、二人も想像してたと思うけど……、あの二人はブラックリベラルで間違いない。これを見てくれ！」

クリスは、壁に付いている大きなモニターに二人の顔写真を表示させた。

「左の青年が、アルス。右の少年がキル、と呼ばれているらしい。」

二人共、正式な魔力ランクはまだ分からないけど、おそらく君達と同じくらいはあるだろう。」

この魔力ランクとは、魔力を持っている者の最大限の数値でランクが別れている。一番低いのでEランク、ある一定の数値以上を持つていれば最大限のSSSランクとなるが、バルパレス部隊の中で、SSSランクを持つているのは、マイカとリーナの二人だけである。しかし、そこまで魔力を上げると、自分と、周りにも何かしらの影響を与えてしまうかもしれないので、Sランク以上の魔法を使う時には、バルパレスでは許可証が必要なので、めったに使う事は無かった。

「クリス部隊長。この二人に会うことは出来ませんか？」

マイカがモニターを見ながら言った。

「そうね。会って色々話してみたいわね。」

リーナもマイカに賛成する。

「しかし、もし戦う事になりさえすれば、勝ち目はないぞ！こんな事で許可証は貰えんだろうし。」

「そんな事にはならないと思う。何となくだけど……」

「私もそう思います。昨日の夜だって、二人が攻撃してくることは一切無かった。」

マイカとリーナは何故だかそう確信していた。

「しかし、普通に会いに行っても向こうは警戒するぞ。五課に侵入しているから捕まえに来た、と思うだろうし。」

しかし、マイカとリーナはどうしても会いたい、いや、会わなければいけない！。そんな直感が働いていた。

「……じゃあ、こんなのはどうかしら？」

リーナが一つの提案をだした。

第四章 二人の隊長（後書き）

こんにちは！この話も修正し終わりました。どうだったでしょうか？自分の中でも、マイカとリーナのキャラがあまりハツキリしないのですが、マイカは親しみやすいタイプ。リーナは冷静なお姉さんタイプ…と思っておいて下さい。次は、四人が再び出会います。

第五章 依頼

ウェールズ研究所を爆破してから三日。二人は《ドリーム》という喫茶店で、カウンターに座り優雅にくつろいでいた。

「なんでも、情報によれば五課の連中がお前らを捜してるらしいぞ、いれたてのコーヒーをアルスの前に置くと、カーフはそう言った。あちゃー、やっぱり捕まえようとしてるんですね。せっかくケース返したのに…」

キルは巨大パフェを頬張りながら顔をしかめる。

「まあそんな事で許して貰える訳ないわなあ。」

アルスも出されたコーヒーを飲みながら言う。

「グラハムを殺したのもお前らなんだろう？」

カーフは新聞を見ながら言った。

「あのオッサンが悪いんだからな！俺達を利用しようなんて百万年早いんだよ！」

人気の少ない裏路地にあるため客の出入りは少ない。というか、いつも客がいないので気軽にこんな話が出る。

「アルスさん…。元からグラハム殺すつもりだったじゃないですか。」

キルが呆れた顔で言う。

「まあな。あんだだけ悪事を働いて、バルパレスも証拠が無いから捕まえられなかったんだ。俺等に感謝して欲しいぐらいだぜ！でも…、顔見られたからな、見つかるのも時間の問題」

カランカラン！

珍しく客が来た、と思っただらそこには見覚えのある顔が…

「お久しぶりね。お二人さん！」

そこにはマイカとリーナが立っていた。アルスとキルは二人の方を見て啞然としている。

「いらっしゃい！まあ掛けなよ。」

「馬鹿野郎、カーフ！俺達を捕まえに来たに決まってるじゃねーか！！」

カーフの優しい言葉にアルスは慌てる。それを見たリーナが、
「フフ、心配しないで！別に捕まえに来たつもりじゃないから。」

マイカとリーナはアルスの隣の椅子に座って

「コーヒーを二つお願いします。」

と、注文する。

「はいよ！」

カーフはすぐに準備に取り掛かる。

「どういう事ですか…？」

キルは疑問をすぐにぶつけた。

「その前に、自己紹介しようか！私はマイカ・ステイナー。五課の隊長をします。」

「私はリーナ・フラック。同じく五課の隊長をしています。」

二人の自己紹介が終わった時に、

「お待ちどうさま！」

と、カーフはコーヒーを差し出す。リーナが

「ありがとうございます。」

と、いつて二人はそれを受け取る。

「あつ、僕は…」

と、自分も自己紹介しようとするキルだったがアルスからチョップが飛んでくる。

「馬鹿かお前は！ここに来た時点で全てバレてんだよ！」

それを見ていたマイカとリーナは笑っていた。

「やっぱり。悪い人達じゃなかったね、リーナ」

「クス。そうだね。」

「当たり前だ！！誰だ！俺等を悪党みたいな言い方をした奴は。」

アルスがすぐにツツコミを入れる。なんだか、すでに馴染み出している四人。アルスはフー、と深呼吸をして落ち着かせる。

「それで、捕まえる気が無いならなんでここに来たんだ。」

二人は目を合わせリーナが口を開く。

「今日はブラックリベラルの二人に依頼を頼みに来たの。」

「…依頼…、ですか？」

キルが目を丸くして聞き返す。それにマイカが答える。

「そう！詳しい内容は五課で話すから、付いて来て欲しいんだけど

…」

「ちよつと待てよ。俺達の依頼料は安かねーぞ。」

それにリーナが微笑みながら答える。

「そこは取引をしましょう。」

「取引…ですか？」

リーナの意外な答えに二人は耳を傾ける。

「そう。もし依頼を受けてくれるのなら、あなた達は自由の身。断るのなら明日にでも、あなた達を指名手配にする。」

リーナの言葉に驚く二人。

「だって、さつき捕まえる気は無いつて…」

キルが思い出したかのように言う。

「そうよ！今日だけはね。」

マイカの言う通り、今後も捕まえない、なんて一言も言っていない。アルスは少し考えて答えをだす。

「わかったよ！この依頼、タダで引き受けてやるよ！」

アルスの答えに、マイカもリーナも満足そうだ。

「交渉成立ね！少し歩いた所に車を停めてあるの。そこまで行きましょー！」

リーナに誘われるまま二人も店を出る。

車の場所まで行くのに大通りを歩く四人。しかし、そこから妙な違和感を感じるアルスとキル。

「アルスさん、アルスさん。なんか…視線が痛いんですけど…」

小声で喋るキル。

それに小声で返すアルス。

「お前もかキル！何なんだ、このみんなからの冷たい視線は…？」

答えは簡単だった。

それはマイカとリーナにあった。

二十歳という若さで隊長となったこの二人。尚且つ、高い魔力とこの可愛さ。

バルパレスどころか民間人にもかなりの人気があるのだ。そんな二人が歩いていることで視線が集まるのは仕方ない。しかも、一緒歩くなんて、一般人にしてみれば夢のまた夢。なのに見知らぬ男が一緒に歩いているということで、怒りや憎悪、嫉妬や怨念といった感情がこの視線には凝縮されていたのだった。そして、車に辿り着いた時には、二人は今まで感じたことのない疲れを体感するのだった。

車を走らすこと十分。五課へ着いて車から降りる。

「改めて見ると、凄い施設ですねえ！建物は大きいし、綺麗だし。」

以前侵入した時は夜で暗かったし、屋上に降りたため気がつかなかったが、正面から見てみるとキルの言った通りだった。

「フフ、さあ行くわよ！」

関心するのほどほどに、四人は中へ入って行った。

アルスとキルは二人について行くが、すれ違う人全員に握手を求められた。

「なあ…、俺達って、此処じゃ人気あんのか？」

アルスが気になって聞いた。

「そうよ！ブラックリベラルは、前から少し人気あったし、バルパレス支部に初めて侵入した二人だからね。」

マイカは苦笑いでそう言った。それを聞き、キルのテンションが上がる。

「アルスさん！侵入して良かったですね！！」

キルの頭に本日、二度目のチョップをするアルス。

「着いたよ。」

リーナは部屋の前で止まり、ノックをした後、二人を引き連れ中へ入った。

「初めまして。私はここの支部隊長をしているクリスです。宜しく。」
クリスは二人に握手を求める。二人は、またかよ！、というように五課に来て何度目かの握手をした。そして五人はソファアへ座り、話を始める。

「それで、俺等に頼みたい依頼とは？」

クリスは真剣な表情で頷く。

「実は、三ヶ月前にアルディアのユナシリムの森という場所の奥深くで、古代遺跡が発見されてな。今までその扉を開ける方法を調べていたんだが、一週間前、ようやくそのパズコードを解析して開けることが出来たんだが…、中はモンスターも徘徊している状況だった。だから君達にこの二人と協力して、古代遺跡を調べて来て欲しいんだ。」

「何故俺達が必要なんだ？この二人が行くなら、俺達は必要ないだろ？」

クリスはちよつと苦笑いを浮かべる。

「一応、場所は古代遺跡。何が起こるかわからんからな。用心の為だ。…それと、正直な話、五課にいる皆がブラックリベラルの闘いを見たい、と言い出してな。」

「それが本音かよ！…まあ引き受けたしな、やってやるよ！」
アルスとキルは頷く。

「そうか！それは助かるよ。それから、今日はここに泊まって行ってくれ！明日の朝、出発、ということにしよう。マイカ、リーナ。二人を部屋まで案内してあげてくれ。」

「わかりました。」

そう言っつて話は終わり、アルスとキルは部屋へ案内された。

「じゃあ食事の準備が出来たら、呼びに来るから。」

そう言っつと二人は戻って行った。

「それにしても、古代遺跡ってどんな感じなんでしょうかね？」
ベッドに横になりながらキルが尋ねる。

「そうだな…、三千年前に一度、人類が滅んだのは聞いたことあるだろ？」

キルは頷く。

「その時は、今よりもっと高い技術力を持っていたらいいからな！まあ、いつの時代に造られたかはわからないけど、今ではお目にかかれない物もあるかもしれないぞ。」

アルスとキルは、マイカとリーナが呼びに来るまで遺跡の話で盛り上がった。その後の食事も、五課では初めて、と、いうぐらい、うるさいものだったらしい。

第五章 依頼（後書き）

ここまで読んで下さった皆さん。こんにちは。もつと短く済むと思っていたのですが、長くなってしまうた。しかも自分で見てみたらビツシリ！って感じで。僕自身あんまりビツシリ書いてあるのは嫌いなんです、それを自分で犯してしまいました。すみません。次の次から気をつけたいと思います。次も多少長くなるかも知れませんが、この先の鍵を握る人物がチラッとでてきますので、ここまで読んでくれた人なら、次回作も最後まで呼んで頂けると心から願っています。

第六章 古代遺跡

「それじゃあ、これを持つといてくれ。」

午前九時。古代遺跡へ行くために正面の駐車場へ集まった四人。

クリスからアルスとキルに渡されたのは、小型の四角い機械。

「クリス。…これは？」

アルスが聞く。

「これは、バルパレスのネットワークを通じて、特殊電波を受信出来るものなんだ。これを持っていけば、こちらのモニターに詳しく建物の構造を教えてくれるし、リアルタイムで状況も見ることが出来る。まあビデオカメラだとしても思ってくれ！」

「へえ、凄い技術力ですね。」

キルはまじまじと機械をみつめる。

「まあこういう時の為に造られたからね。それから、これからの映像は本部も含め、バルパレス全員が見ることになるから、頑張つてね。」

「……………ハイ!!??」

恐らく、四人全員がそう心の中で叫んだらう。どうやらマイカとリーナにも知らされてなかったらしい。驚きが隠しきれない。

「クリス部隊長！一体どういう事なんですか？」

真つ先に口を開いたのはリーナであった。

「みんな君達のコラボを楽しみにしてるんだよ。」

まあ、…確かにただの出発だけで、大量に五課のメンバーが集まる、ということは考えられなかった。アルス達の後ろには多くの人が見送りに集まっていた。

「も、もう…いこうか！」

マイカの提案に三人は頷く。

移動は、五課の戦闘機で運んでもらった為、相当な早さで目的の古代遺跡の入口へ着いた。

その遺跡の扉には、モニターが付いており、リーナが何かを打ち込んでいる。その扉は、何でできているのか分からないような素材であり、かなり分厚いようだ。

ゴゴゴゴゴ！

と、音を立て、上へ持ち上がる。外からでは暗くて中が見えなかったが、一歩中へ入るとそこには幻想的な光景が広がった。青白く明かりが灯る。なんとそれは、この遺跡自体から灯っていたのだ。両サイドの壁と天井、ましてや床からまで、青と白で形成された光が、迷彩のようなアートになっていた。

四人は、このどこまでも続く幻想的な光景に、うつとりしながらも進んでいた。

通路は、思っていたよりも広く、四人並んで歩いても、狭い、と感じない。曲がり角は所々あるものの、別れ道は今の所無かったのだ、安心して移動できた。

グウルルルル

突然聞こえる、謎のうめき声。

「皆、モニターだ！」

アルスは、いち早く気づいた。皆も一気に戦闘モードの顔つきになる。

およそ二十メートル先の曲がり角から現れる一体：いや、二体の同類モニター（以下グルバドA、B）がこちらを睨むように見詰めている。

ライオンの姿のような、四足歩行で歩いてくるグルバドだが、大きさが半端ではない。二体とも三メートルはある。

「オイオイ、一体何喰ってあんな大きくなったんだ？」

「共食い、ですかねえ。」

余裕のある会話をしているアルスとキルだが、一気にその余裕も無くなることになる。

二体同時に走った：と思った瞬間、二十メートルはあった距離も、一気に一メートルまで縮んでいた。

グルバドAはアルスに狙いを定め、爪を伸ばし切りつけようとするが、

「グラビテイル！」

アルスの後ろから発射される重力弾によって吹き飛ばされる。

「油断し過ぎだよ。アルス」

攻撃したのは銃を構えるマイカであった。

「馬鹿。お前が攻撃するのを待ってたんだよ！」

ハッキリ言つて嘘である。

「ハイハイ。貸し一ね。」

一方、同じ頃、グルバドBもキルに狙いを定め迫っていた。こちらはキルに噛み付こうと鋭い牙だらけの口をあけた。キルはとつさに魔法でシールドをつくるが、破られるのも時間の問題であった。シールドに亀裂が入ったその時、

「伏せて！」

と、声がした。キルは頭を抱え伏せる。

飛び出して来たのは、大剣を構えるリーナ。リーナは亀裂の入ったシールドと一緒に大剣を振り切る。すると、シールドはパリーンツと、割れ、グルバドBの胴体を斬る。

致命傷にはならなかったが、一旦距離を取るB。

「ありがとうございます！リーナさん。」

素直に礼をいうキル。

「うっん。いいよ、これくらい。それより、今がチャンスだよ。」

リーナは今度は剣の先をBに向け、魔法をだす。

「ダイヤモンドクロス！」

Bの左右の床から現れるキラキラと光る氷の刃先が、同時にBに向かって伸びる。

それを後ろへ跳躍しぎりぎりかわしたB。しかし、

「サンダーアロー！」

キルは飛び上がるのを待っていたかのように、一本の雷の矢が逃げ場のないBの頭を貫き、そのままドサッと、落ちる。

一方、アルスとマイカ

飛ばされたAは、口を開けエネルギーを発射する。アルスはAに向かって走り、剣でエネルギーを斬り消滅させると、そのまま口の中へ突き刺した。

二つの戦闘は同時に終わった。

「いきなりこんな奴らが出てきたら、この先思いやられますね。」

モンスターのレベルの高さに少し驚いているキル。

「確かに。外にいるモンスターより、数段強い。これは気合い入れて行くしかねえな。」

アルスの言葉通り、気合いを入れ直し、先へと進む四人は、そこから、次々と現れるモンスターを倒しながら奥へと進む。

入ってから、二時間は経っただろうか…、初めて扉のある部屋があった。中へ入ると、両サイドの壁際に置かれている石像が計十体置いてあるだけで、モンスターはいなかった。

四人は安心しながら中央まで歩くと、

侵入者は、排除する

と、声が聞こえ、石像が動き出す。

「クソ、皆走れ！！！」

奥にある扉を開けると、キル、リーナ、マイカと出て行くが、アルスが出ようとした瞬間、石像の一体の目が光り、扉が閉まった。

「アルスさん！開きませんよ！！」

「クソが！あいつら倒さないと開かないってか。…キル！お前達は先に行ってる。俺は後で必ず追いつく！！」

その言葉に少し悩むキルだったが、

「解りました！早く来て下さいよ！！」

キルは、心配そうなマイカとリーナを連れ、その場を離れた。

「さて、やりですか！何処からでもどうぞ。雑魚共！」

アルスは黒剣を抜いた。

アルスと別れた三人は、最深部も近いのか、多くなっているモンスターをなんとか倒し続ける。すると、アルスと別れた所以来の扉のある部屋の前に着く。

「明らかに…畏ですよね。」

「…でも、…行くしかない。」

マイカが扉を開けると三人は中の様子を伺う。

中には一人…、いや、人間型のロボットが一機立ちはだかつている。

「ホウ、ヨクココマデコレタナ、ニンゲンゴトキガ。」

「あなたは…、何者？」

リーナが尋ねる。

「ワレワA001。コノイセキヲマモルモノ。ダークブレス！」

A001は魔法を唱えた。黒い炎が天井一面に広がり、それが意志を持つように三人に体当たりをする。

「キャッ」

「ウワア」

弾き飛ばされた三人を見て、A001は、魔法の剣を造る。

「ダークソード」

A001の手に剣が握られ、三人に向かって人間には到底不可能な高速移動で近付く。

ガキーン

いち早く起き上がったリーナは大剣を振り降ろすが、剣を持っていない方の手で掴まれる。

「そんな!?!」

「ホウ。コンナニモハヤクタチアガルトハ…。シカシ、シネ!」

大剣に力を入れるが、ビクともしない。そんなリーナにA001は剣を突き刺そうとする。

「マジックシールド!」

「ギルレーション!」

リーナの全身をキルのシールドが防ぎ、A001の剣を止める。

そしてマイカの魔法で、上から光のエネルギーがA001に向かって落ちて来る。

A001も後ろへ回避する。が、マイカの魔法は床に当たる寸前で軌道を変え、回避したA001に直撃する。

ダアアン!!と激しい音が響き、エネルギーの爆発で煙が立ち上る。

「大丈夫ですか?リーナさん?」

キルとマイカが近寄る。

「ええ、ありがとう!…それよりあいつは!?!」

三人は煙の立ち上る場所を見る。視界が悪く、生きているのか、死んでいるのかも分からない。

「でも、あれだけ直撃したんですから…多分もう…」

「オシカッタデスネ」

「!!!ウガア」

キルが衝撃を感じたつと、思った時には既に壁に衝突し、うずくまる。

「マズ、ヒトリ」

マイカとリーナが横を振り返ると、キルの立っていた、すぐ真後ろの位置にA001が立っていた。

「そ、そんな…。直撃したはず…！」

マイカは何故無傷で立っているのが解らなかった。

「フフ、アレハアブナカタデスヨ。ホメテアゲマシヨウ。デスガ、ワタシノスピードダカラコソ、ヨケレタンデス」

A001はまた二人の目の前から消えた。

「どこに行ったの!?」

リーナが左右に首をふってA001の姿を捜す。

「!!! リーナ!上よ!」

マイカが叫ぶ。

「オソイデスヨ。ダークフレイム!」

リーナも上を見るが、既に遅すぎた!黒い火の玉はリーナの足元に落ち、爆風でリーナは高く飛ばされる。そのまま受け身もとれずに床に叩きつけられ、起き上がる事は出来なかった。

「コレデ、フタリメ。ノコルハアナタヒトリ。」

「クツ、そう簡単にはいかないわよ!グラビティール!」
バンバンバンバン

一気に四つの重力エネルギーをA001へ発射する。四つのエネルギーは一齐にA001を囲むと、ぶつかっていく!

四つの重力エネルギーは大爆発を起こし、床が大きく凹む程の威力だった。しかし、その場所にA001の姿は無い。

「ダカラ、ムダナンデスヨ。ダークソード」

背後から声が聞こえ、急いで振り返るが、すでに切りかかっているのを見て、目を瞑る。

キーン！

何かがぶつかると音がして、恐る恐る目を開けると、目の前には、剣を受け止めている、アルスの姿が。

「ワリイ！遅くなった！」

そういうと、A001の体を思いっきり蹴飛ばす。A001は、後ろへ滑りながら、足でブレーキを掛ける。

「マイカ。大丈夫か？」

アルスは心配そうに聞く。

「うん。私は大丈夫！でもキルとリーナが……」

「モウヒトリイタトハ……。シカシ、ナンニンキテモオナジコト！」

A001はアルスの前から消える。

「マイカ！二人を起こして壁に寄ってる！」

アルスの真剣の顔にマイカも一回頷き、二人に駆け寄る。

「マイカ！」

もう一度呼ぶアルスに顔を向ける。

「借りは返したからな！」

ニヤリと笑うアルス。それに笑い返すマイカ。

キーン

アルスの背後に現れ、切りかかるA001の攻撃を、楽に受け止めるアルス。

「ナニ！ナラモウイチド！！」

再び消え、今度は上から魔法を唱える。

「ダークフレイム」

上から降ってくる火の玉を瞬間的に察知し、それを剣で弾き返し、

その火の玉はA001自身に直撃する。

落下するも、寸前で体勢を整え着地する。

「自分の技で怪我するなんて、ざまあねえな。」

笑みを浮かべるアルス。

「ナゼダ！ナゼワレノバシヨヲミツケラレル！」

冷静さを失っているA001にアルスが答える。

「目で追えないなら、気配を感じるまで。それにお前の攻撃は、パターンが同じなんだよ！」

「……フッフフ、マサカオマエノウナヤツガ、イヨウトハナ。」

A001は剣を構えた。

「本気を出すつて事かな？」

アルスも剣を構える。A001が消える。アルスは冷静に気配を探す。

カキーン、カキーン

「無駄だつて言つてんだろ。」

アルスは何度も相手の剣を防いでいく。

「うっ、ああ……っ……」

「キル！キル！大丈夫？」

マイカの声に目を開けるキル。リーナももう目を開けて、キルの隣で、壁にもたれ掛かって、アルスの戦っている様子を見ていた

「あっ、マイカさん。僕は……そうだ！！アイツは！？」

ガバツと起き上がるキルはキル体に痛みが走り顔を歪める。

「大丈夫！アルスが今戦つてるから。」

「……そうですか。良かった……アルスさんが来てくれて。」

マイカはそれに頷くと、三人はアルスを見守っていた。

「ダークフレイム！」

今度はアルスに届かないところに打ち付け、辺りに煙を撒き散らした。

「ちっ、目眩ましのつもりか。」

A001は煙の中から瞬時に剣を突いてくるが、紙一重で横にかわしたアルス。

さらにその方向に剣をスイングさせるように切りかかってくる。それも紙一重でかわす。しかし、剣の刃先がいきなり数センチ程伸びた。

「！！！」

それを無理矢理、身体を捻ってかわそうとするが、流石にかわしきれずに左腕をバツサリ斬られた。腕からは、みるみる血が零れ落ちる。

「ハハハハ！シヨセンキサマモココデシヌンデス。モウラクニナリナサイ！」

「ツク、お前、調子に乗るなよ！」

アルスが睨む。

「サイゴハ、ワタシノイチバンノワザデ、ゼンインヨラクニシテサシアゲマス！」

そういうと魔力を溜め詠唱した。

「シャドウデスベド」

唱え終えたと同時に多くの影が現れ、死神のような姿に変わる。その数およそ三十はいるだろう。

それを見たアルスは、持っていた剣を地面に刺すと、詠唱を唱える。

「！！アルスさんが…魔法！？」

キルが相当驚く。

「どうしたのキル？アルス君だつて魔法は使えるでしょう？」

リーナはキルがそんなに驚く理由が分からなかった。それは、マ
イカも同じであった。

「…確かに使えるつて言つてました。…でも、僕は二年間一緒に
いて、アルスさんが詠唱魔法を使うのは…初めて見るんですよ！」

「え！？」

「コレデオワリデス！サア、ミンナイツシヨニシニナサイ！」

三十体の死神が一斉に動き出した。

「死ぬのはお前だ、ポンコツが！ライトディサピアー！」

アルスがキルの前で初めて使つた魔法。それは…

死神が向かつて来る途中、急に動きが止まる。床は真っ白な光に
包まれ、その光が死神を捕まえているようだった。

「ナ、ナンダコレハ…。ナンダコノマホウハ！」

白い光はA001の動きも止めていた。

そして、その光が凄まじいエネルギーで爆発した。

死神は次々と倒される、と言うよりも、消滅していった。

そしてA001も、その圧倒的な力の前では全くの無力であった。

全てを終わらせたその魔法は静かに消えていった。

アルスは剣を抜くと、A001の元へ歩いて言った。

「コ…ノワ…タシガ、ニンゲン、ゴトキ…ニ、マケルトワ…」

「だから言つたろうが！死ぬのはお前だつてな。」

そうしてアルスは剣を突き刺した。

それから、A001は動くことは無かった。

「大丈夫？アルス？」

三人が近づき、マイカが尋ねる。

「俺は大丈夫だ。みんなは平気か？」

三人は同時に笑顔になる。

「…やつぱり、すごいです。アルスさんは！」

キルは尊敬の眼差しでアルスを見る。

「ハハハ。…キル。将来お前には、俺を超えて貰うぞ！」

そんなの無理ですよ！というようなキル。

「とにかく、多分この奥が最深部ね。行きましょう。」

リーナの言葉に四人は最深部へと進む。

最後のフロアは先程の部屋より小さいが、階段が造られており、その上には祭壇があった。その祭壇の方へ歩く四人だったが、祭壇の上に、一人の男が急に現れた。そして、そこに置いてあった物を手に取り、振り返った。

「久しぶりだな…アルス。」

三人がアルスを見る。

「…貴様は！サディケル！！」

サディケルと言われた男は笑顔を見せる。二十代後半で髪が赤いのが特徴的な男だ。

「嬉しいよ！覚えていてくれて！」

「忘れるものか！！四年前のことは…」

こんな感情的になるアルスを誰が想像出来るだろうか…。

「アルスさん…誰なんですか…あいつは？」

恐る恐る尋ねるキル。

「あいつはレヴォルノという少数精鋭組織のリーダー。サディケル！」

「レヴォルノって！あたしたちも知ってる。三年前にバルパレスの総指令官だったラファードさんを殺したのが…レヴォルノだった、という噂だった」

「バルパレスも全力で調べたけど、何一つ解らなかつた組織！」

マイカとリーナも、その時はまだ隊長ではなかつたのだが、当時のバルパレスの中で一番強かつたと言われていた総指令官が殺されたので、やたら話題になった。

「ああ、ラファードか…。懐かしいな。あの男も私に逆わらなければ、生かしてやったのにな。」

「あなたは何が目的なの！？」

リーナが叫ぶ。

「フッフフ、アアツハツハツハア！…何が目的か…だと？何も知らないお前等に教えてやろう。私の目的はただ一つ、…世界の浄化だよ！！」

「世界の…浄化…？一体何のことです？」

「そうか。ここに在ったのはルーイン・ストーン！それに、やつぱりお前がグラハムをいいように操っていたのか！」

「グラハム？ああ、あの男か！結局は何一つ使えなかつたな！それからアルス。私はもうこの石で三つ目になる。」

「！！！！なんだと…！！」

「私の目的も近い。…そろそろ本格的に動かせて貰うよ！邪魔をしただけはするがいい！もっとも…私の部下に勝てたら、だかな。」

そう言つとサディケルは消えていった。ルーイン・ストーンと共に…。

第六章 古代遺跡（後書き）

長かった、永かった、疲れました。今、これを見ている人も、疲れたんじゃないでしょうか！それにしても久々の戦闘：いや、五課侵入の時はアルスとキルは闘ってないから、実質的にこれが初めての戦闘シーンですね。どうだったでしょうか？自分的には分かり易く訂正しまくりでしたが自信はありません！最後にも変な人が出てきましたね。次は短いお話なのでサクッと読めると思います。では、お楽しみに！

第七章 真実

あれから四人は無言のまま、ただ静かに五課へ帰って来た。

五課はもう騒然としていた。本部の幹部達も、アルス達の帰りを待ちわびていた。

それもそうだろう。遺跡で起こった全てが、見られていたのだから。

五課の前まで来ると、クリスが近づいて来る。

「四人とも、幹部の人達はもう集まっている。今すぐに」

「待つて下さい。まずはアルスの怪我の治療を優先させてください」

マイカがクリスの言葉を遮って言う。

「…そうだな。じゃあ終わったら会議室に来てくれ。」

そう言うのと、慌ただしく走って行った。

「行きましょう。アルス君」

リーナがアルスに促す。

四人は治療室へ歩く。

治療室で治療をもらうアルス。

「アイテテテ、くそ、あのポンコツロボットめ！」

深刻な顔をして立ち尽くす三人。それを見てアルスは声を掛ける。

「そろそろ元気出していこうぜ！もうなるようにしかならないんだからな。」

アルスは包帯を巻かれていく左腕を見ながら言う。

「それに、ここまで来たらもう…みんなに関わりのないことじゃなくなつた。…俺が、全ての真実を話すよ！サディケルとの関わりも、ルーイン・ストーンの実態も。それでみんなも少しはスッキリするだろう。」

「…！！ 三人は驚く。」

「全て知ってるのアルス！」

マイカがアルスの顔を見る。

「…それは、これから話すよ。会議室に行こう。」

会議室に入ると、すでに全員座っていた。五十人はいるであろうか…偉そうな人ばかりだ。

皆が座っている正面に、四人の座る場所があつた。何かの記者会見のような状態だった。

四人は奥から、キル、アルス、マイカ、リーナという順で座る。

まずは、一番の権力者であろう老人が、声を出した。

「バルパレスのお二人。今日のご苦勞であつた。私は、総司令官のランティスという。…まず…アルス君に聞きたいんじやが…。あのサディケルと言う男を知っていたようじやが、どつという関係じや？」

アルスは少し表情を曇らせる。

「サディケルは…目的を果たすための同士を集めていた。そして、四年前に…俺は奴と出会つた。」

アルスはそのでタバコを一本口に加え、火をつけてからまた話し

出す。

「俺は、北東にあるスメリー又地方の小さな村で育った。もともと魔力の強かった俺は、十八になった時に、ふと村にやって来たサディケルと会いスカウトされた。一緒に世界を浄化しないかつ、てな！当然俺は断ったが奴は俺を殺そうとしてきた。奴の強さに俺は逃げることに出来なかった。でも奴は、俺を追っては来なかった。サディケルは違う目的の為に村を訪れ、ついでに俺を誘っただけだった。…そして、あいつによって村人は全員殺された！村長や、友達や、俺の親まで！……スメリー又地方を管轄している三課の人なら覚えてるだろ？」

三課の部隊長が急に立ち上がる。

「そうだ！四年前にある村が壊滅する大虐殺が起きた……君はあの村の生き残りだったのか！」

「そうだ。そして俺は、あいつを殺す旅に出たが、見つける事は出来なかった。…その旅の途中でキル！…お前を見つけたって訳だ。」

「…そう、だつたんですか。」

キルは悲しそうな顔で俯いた。

「しかし…、サディケルの浄化とは、一体何なんじゃろう？それに、ルーン・ストーンを集めて一体何を……」

「サディケルがルーン・ストーンを集めるのは、それが世界を浄化する鍵だから。」

「浄化の為の…鍵？」

マイカが呟く。

「そう。この星に散らばるルーイン・ストーンは全部で五つ。このルーイン・ストーンを五つ集め、石を近くに纏めると、人類を破滅に導く悪魔が現れる。」

リーナは難しい表情で、

「破壊を導く悪魔？それは一体なんなの？」

「三千年前に実際に人類を滅ぼした、破壊の支配者。【ルーイン・ルーラア】」

「……ルーイン・ルーラア？」

「そう。今から話す事は実際に見た者はいないが真実だと言われることだ。」

昔、神というものがいた。

神はこの星を造り様々な生物を置いた。

人間に、魔物、鳥やドラゴンなど……。

しかし、その中で人間だけが、恐ろしい程に知能が発達した。

このままでは人間が全ての生物の頂点に立ってしまうと思った神は、それは不公平だと考えた。

火があれば水がある。光があれば闇もある。人間にとっての平和があるならその逆も造らないと、と考えた。いつか、愚かな人間は必ず現れる、と確信を持ち、人間に集められるように、とルーイン・ストーンを造った。そしてそれを全て集めた時に人類だけを滅ぼす悪魔も造った。それがルーイン・ルーラア」

アルスはここまで話すと、タバコを消した。

そして、さらに付け加えた。

「しかし、三千年前に人類が滅亡したあと、ルーイン・ストーンは

様々な場所に飛び散った。本当は、今日のような古代遺跡だったんだろうけど、他の四つはどこに行ったかは分からなかった。だからサディケルもレヴォルノという組織を作り、石を集めさせようとした。まあ話はそんなとこだ！」

「ねえ、アルス。」

「なんだ？」

マイカに聞き返す。

「何でアルスは…そんな話を知っているの？」

「そうね。こんな誰も知らなかった出来事を、何でアルスとサディケルは知っているの？」

リーナも聞いて来る。

「それについては、俺の四年前の過去を話さないといけないな…。」

アルスは長くなるなっと思ひ、もう一本タバコに火を付けた。

「俺が、サディケルから逃げ出し、しばらくしてから村へ戻ると、……もうそこは村じゃなかった。」

アルスは顔を天井へ向け、目を瞑る。

アルスの頭の中には、今もまだ、あの時の記憶が、はつきりと思ひ浮かべられる。

第七章 真実（後書き）

皆さん、おはようございます。寝ないで小説生活があと三時間で2日目に突入します！しかし、コーヒーとタバコのおかげでまだピークはやってきません！さて、真実がほとんど分かりました。こんなもんか…と思われた方達には申し訳ありません。ですが、めげずに完結させたいと思いますので、応援宜しくお願いします。次の話は、四年前のアルスの過去です。

第八章 アルスの過去

四年前、アルスの村

多くの木々に囲まれた緑豊かな小さな村。…の筈だった。

目に写るのは激しく燃え上がっている家。全壊している小屋。荒らされた畑。所々に倒れている人。雨に流される血の海。

子供の頃に、駆け回っていた筈の村は、すでにアルスの知らない世界となっていた。

その知らない世界への入り口で佇んでいる十八歳のアルス。

「な、んだよ…これは？」

土砂降りの雨の中、ゆっくりと足を動かすアルス。

絶望感漂う少年が見たのは、村の中央で倒れている二人の男女。

「父…さん？母…さん？」

アルスは一気に駆け寄る。

「父さん！母さん！おい！返事しろよ！！」

アルスの目からは雨と一緒に大粒の涙が零れる。

「おい！なんの…冗談なんだよお！何とか言えよお！！こんなとこ

で…寝てんじやねえよ。…」

アルスが何を言っても二人が反応することは無かった。

アルスは何度も何度も地面を殴りつけた！

「ちくしょう！ちくしょうおお！」

アルスはその場に座り込み泣いているとき

「ア…ルス、か？」

その声に顔を上げるアルス。左右に首を振り、辺りを確認すると、老人が苦しそうに倒れていた。

「村長！！」

アルスは這いつくばるように村長の元へ行く。

「村長！ガンツ村長！しっかりしろ。」

アルスは村長の体を支える。

「アルス…、もう、わしも…なが…くない、ようだ。皆…一人残らず、殺…された。女、子供関係なく、な…。あの男、に。」

「俺のせいだ…。俺が魔力を持つていたから！俺が逃げたから！！俺がもつと強ければ！！…こんな事にはならなかった…。」

アルスの涙は止まることなく、声を震わして言った。

「お前の、せいではない…。お前が…、生き残ったことは…きつと、何か意味がある…。やらなければ…いけないことがある…。あの、男は…ルーン…ストーンを、ゴホッ！」

「村長！！」

村長は力を振り絞り、アルスの頬に手をやる。

「…いいか、アルス。よく…聞け。ここから、北東にある山奥に…ゴホツ、禁断の…洞窟がある。そこへ…行くのだ。」

「そこには…なにがあるんだよ?」

アルスは村長の手を握る。

「…真実、だ。いいか、アルス!全てを…知れ。そ…して…この、星を…す…く…え…」

村長の手が力無く落ちる。

「…うわあああああ」

一人の少年の悲痛な叫びが響き渡る。

アルスは全員を広い場所へ並べると、そつと花を添える。

「北東にある、禁断の洞窟…」

アルスは村長の家に飾られていた黒い剣を手に取ると、全員の死体に一礼し、村を後にした。

アルスは、山奥に現れるモンスターをこれでもか、というほど倒し続け、洞窟へ到着する。

「…ここか! 全ての真実…か。」

躊躇することなく入っていくアルスは、最深部まで到着する。
しかし、そこにいたのは十メートルはあるだろう、巨大なドラゴンが居座っていた。

今は畳んでいるが明らかに大きい翼。太い足。鋭い爪を持った手。そして、長い首に威圧感のある顔つき。

「おっ、お前は一体：」

「ほう、ここに人間が入って来るのは何年振りかな？しかも私を見て逃げぬとはいいい度胸をしている。」

ビリビリと伝わるようなプレッシャーで話すドラゴン。

「ここで真実が聞けると教えられて来た！それはお前の事なのか！？」

「いかにも！私は五千年前から生き続けているからな。その前に、名前は何という？」

「俺はアルス。お前は？」

「私は二代神龍のデストロイドという。では、なにから知りたい！？」

アルスはそこで全てを知った。ルーン・ストーン的事や、この星に訪れる危機を。

「成る程な…。またそんなことをしようとする奴が現れたか。それで、お前はどうする？」

「決まっている！俺はサディケルを殺す。この星も救ってみせる！それが…俺の全てだ。」

「アルスよ！」

「！？ なんだ…？」

「私と…契約しろ！」

「契約？」

「そうだ。お前程の強い意志と魔力があれば、必ず私を使える！私もお前とこの戦いに協力したい！」

「なぜお前がそこまでする必要がある？滅ぶのは人類だけなんだろう？」

「恐らくそのサディケルと言う奴も、二代神龍のイフリードと契約している！お前だけではどうにもできん！このイフリードは三千年前にも破滅を望んだものと契約をしていた。その時、私は人類が滅ぶところをみた。あれば地獄のようだった。三千年前は何も出来なかったが、お前となら、今度は止められる。」

アルスにはデストロイドの気持ちが物凄く伝わってきた。

「…ああ！俺からも宜しく頼むよ！」

「交渉成立だ！私を出すときは己の魔力と意志次第だ！」

そう言うと、デストロイドの体が光り、次々とアルスの中へ吸い込まれていった。

第八章 アルスの過去（後書き）

ここまで読んでくれている人はいるのだろうかとこの話を書いて
いる時にふと思いました。さあ、アルスの過去が明らかになりまし
た。アルスの悲しみが少しでも伝わってくれたら嬉しいです。次の
話は説明している時に戻ります。内容もそこまで深い話ではないの
でさらっと終わる予定です。では！

第九章 四人の決意

アルスは、静寂な空気の中、真実を知ったときの過去を、簡潔に話した。その話を、バルパレスの人達は悲痛な思いで聞いていた。

「そんな事があつたんですね…」

キルは、そんな中でも自分を助けてくれたアルスに、心から感謝した。

アルスにとっては、何でも屋を始めたのも、何も掴めなかったサディケルの情報が入ってくるかもしれない、ということだった。キルと一緒にいると、そんな事も忘れてしまうほど楽しかった。アルスも、キルに対し、密かに感謝していた。

「アルス君も、辛い過去を生きてきたんじゃない。我々も、出来る限り協力しよう！」

ランティス総指令官はゆっくりと立ち上がった。

「いいんですか!？」

アルスの驚く声に、ランティスは微笑む。

「人類の危機に陥っている時に、リューズベルーの組織が何もしない訳にはいくまい。」

「…ありがとうございます！」 アルスは立ち上がり頭を下げた。

それにランティスは笑顔で頷く。そして前に出で、この部屋にいるバルパレス部隊に向かって声をあげた。

「バルパレス諸君！これは人類の滅亡を賭けた戦いになる！そのために、我々で残り一つのルーイン・ストーンの捜索とサディケルの居場所をみつけるのじゃ！」

「はっ！」

それに全員が立ち上がり敬礼をする。そして慌ただしく出ていった。

「クリス君は、今持っているルーイン・ストーンを厳重に守ってください！」

「わかりました！」

クリスも敬礼する。

そして、ランティスはアルスの方を見る。

「しかし、今の話が本当であるなら、サディケルにかなう者は今のバルパレスにはおらん。」

「分かっています。サディケルは俺が倒します。…命をかけて、この星の未来を守ります！」

「アルスさん！僕も行きますよ。僕はアルスさんの相棒ですから！それにアルスは笑顔で頷く。

「マイカ、リーナ。君達も彼等に協力してあげなさい！バルパレス一の力を持つ者なんじゃからな。」

「分かっています。ランティスさん。」

「私達も、そのつもりですから。」

二人は立ち上がり、敬礼する。

それに、満足そうに微笑むと、紙を渡した。それは、Sランク以上の魔法の許可証だった。

「どうじゃ、アルス君。キル君。この戦いが終わったら、バルパレスに来てみないかのおう？初めて侵入したということで、人気もあるようじゃし…。」

「…ハハ、やっぱり知ってらしたんですね。」

キルは頭を押さえる。

「当たり前じゃ！総指令官じゃからな。まあ返事は無事にこの戦いが終わってからでいい。四人とも疲れているじゃろう。明日はゆっくりと休むがいい。」

そう言うと、ランティスは部屋を出ていった。

四人は顔を合わせ、クスッと笑った。

第九章 四人の決意（後書き）

ここまでよんで下さってありがとうございます。このランティスさんはいい人なんです。人望も高く、頼りにされている人です。だから、マイカとリーナがランティスさん！と言っても怒りません。逆に、嬉しいらしいです。話もいよいよ後半戦に入ってきました。次の話は一日もらった休日の中の平和なお話です。

第十話 平和な休日

五課の中にある、とある一室。

「アルスさん！アルスさん！起きて下さい！！」

キルに揺さぶられ、ゆっくり起きあがるアルス。

「もう九時ですよ！」

寝ぼけたまま顔を洗いに行く。

「なんでそんなに、テンション高いんだよ！」

ちよつと不機嫌そうなアルスと違って、朝からテンションの高いキル。

「だって今日は遊びに出掛けるんですよ！マイカさんとリーナさんも一緒に！」

昨日の事が終わってから、四人は、せっかく貰った休日なんだか街に遊びに行こう！ということになったのだ。

濡れている顔をタオルで拭きながら戻ってきたアルスは、

「また、視線が飛んできたらどうするんだよ！」

という問いに、

「そんなこと気にせずいきましょう！」

という答えで、早くも解決する。

それ以降も、テンションの高いキルは、今日着ていく服で迷っていた。

「お前は女か！」

と突っ込むアルス。

「じゃあ、アルスさんはなに着て行くんですか？」

と、聞く。

「んなもん、いつもと一緒でいいんだよ！」

「何を言ってるんですか！せっかくのダブルデートですよ！」

「ああ？それは、どっちがどっちで、どっちがどっちだ！？」

「とにかく！僕らもオシャレしていくべきです！」

と、答えになっていない答えを返すキル。

それから二人は、あーだ、こーだ言いながら、約束の時間を過ぎていくことに気づき、マツハで準備をし、部屋を飛び出る。

一階のロビーに着いた時には、すでに二人は着いており、ロビーの隅にあるカフェで待っていた。

アルスとキルは、結局いつもの格好できたが、マイカとリーナはオシャレな格好をしていた。

「わりい…、遅れた！」

「申し訳ないです！」

アルスとキルは、誤りながら駆け寄った。

「遅いよ！二人共！」

「レディを待たせるなんて、最低だよ。」

マイカとリーナの怒りの声に、二人はヤバイツと思う。が、

「いやあ、そんなことより二人共綺麗！かわいい！もう天使みたいだ！なあキル？」

「ええ、それはもう。今の二人を見れば、世界中の女性がゴミに見えます！」

マイカとリーナの私服姿を見て、嘘は言っていないものの、褒め殺し作戦にでたアルスとキル。

「えっ、そうかな。」

マイカが掛かった。

「二人にそう言っただけで貰えるとは思わなかったな。」

リーナも落ちた。

二人の嬉しそうな顔を見て、アルスとキルはナイス作戦！というように拳を合わせる。

「リーナ隊長お、マイカ隊長お！すごい素敵ですう」

後ろから十二、三才ぐらいの女の子が、そう叫びながら走ってきた。

「フッフ、ありがとう。ミナ！」

リーナは、椅子から立ち上がると、ミナの頭を優しく撫でた。ミナは嬉しそうに微笑む。

「こんな小さい子も五課にいるのか？」

アルスがマイカに聞く。

「うん。この子はミナ。まだ訓練生だけど、魔力は高いよ。」

へえ、とアルスとキルがミナを見つめると、ミナも顔を赤くして見つめ返してくる。

「あ、あの…。握手して貰っていいですか!？」

ミナが、アルスとキルにお願いする。二人が笑顔で握手してあげると、満面の笑みで、ありがとう、というと、嬉しそうに走り出て行った。それを笑顔で見つめるリーナが、

「ミナ、ブラックリベラルの大ファンなんだって!」

「なんであんな小さい子が、僕らのファンなんですかねえ？」

キルが首をかしげる。

それにマイカが答える。

「ミナはね、家族全員をある組織に殺されたのよ。私達でも証拠が掴めなくてどうしようもなかった時に、あなた達がその組織を潰したって訳!」

「そうだったのか…。」

「その時の依頼、引き受けてて良かったですね。」

「さあ！もう行きましょう」

そうリーナが言くと、四人は街へと繰り出した。

とある店の前にあるベンチ。

「なんでこんな買い物の時間が長いんだよ！」

「女性とシヨッピングは疲れますねえ。」

『ハア』

と、同時に溜め息を出す二人。街に出てからずっとシヨッピングなのだが、二人は、三軒目でギブアップ。こうして前のベンチに座っている訳である。

(そっいや、この辺は…)

アルスが周りを見ながらふと思った。

「キル。すぐもどるからお前は待っててくれ！」

そう言うと、アルスはその場を離れた。

カランカラン

「ん？珍しいじゃないか！お前が一人で来るなんて。」

「ちよつとカーフに話して起きたい事があつたんでな！」

アルスは、カーフに今までの事を話した。

「なるほどな！お前等も大変だったな。それで、今の件に関して別に俺は構わないよ。」

「そうか！そんじゃあそんな時は宜しくな！じゃあ行くわ。あいつら待たせるとうるさいからな！」

そう言って、店をでようとするアルスをカーフが引き止める。

「アルス！……じゃあな。」

「…ああ。」

アルスは出ていった。

カーフは良からぬ胸騒ぎを感じていた。

時は昼過ぎになり、四人はファミレスへ来ていた。すでに食べ終わり、キルはチョコレートパフェ、三人はコーヒーを頼み、休憩していた。

「そういえばさ、ランティスさんの誘いはどうするの？バルパレスに入るの？」

マイカがアルスとキルに聞く。

「そうだな…、キル。お前はどうしたい？」

「僕は、どっちにしるアルスさんについて行きますよ！…でも、どっちかというと思ってみたいですね。」

キルは、パフェを頬張りながら言う。

「じゃあ入るか！お前にとってもそっちの方がいいと思うしな。」

「???…でも、そうになるとブラックリベラルは解散…ですかね？」

キルがパフェを食べる手を止め、寂しそうに呟く。

「その事なんだけどな、二代目っていうのを考えてるんだ。現に、バルパレスにはそう簡単に闇組織を潰す事は難しいだろ！？ミナの件もあるし、二代目という形でブラックリベラルを継続させたほうがいいと思ってな。」

キルのテンションが上がる。

「それいいですね！そうしましょうよ！！そうすると僕らが初代でことになりますよね。なんか、カッコイイですね！」

「でも、二代目が簡単に殺された、とかなると、凄くカッコ悪いわよ。あなた達ぐらいの強さをもっている人達を探さない…」

リーナが的確な意見をぶつける。

「ああ、そうだな。それは少し時間が掛かりそうだが、…キル！二代目はお前が捜してくれ。お前の方が、人を見る目があるからな。それに、カーフにももう言っただけあるから。」

「わかりました！僕等より優秀な人を見つけますよ！」

キルは、任してください！というふうな感じだ。それにマイカが付け加える。

「今度は、バルパレスに侵入しない人にしてよ！」

楽しそうな笑い声で、一日だけの平和な休日が終わる。

第十話 平和な休日（後書き）

こんにちは。ついに十話まで来ました！いかがだったでしょうか？この話は今までの中で一番、楽に書くことが出来ました。次の話からは、一気に展開が変わっていきます。苦手な戦闘シーンも出て来始めます。（先が思いやられます）では！

第十一章 デストロイドの力(前書き)

この章では残酷な描写があります。御了承下さい。

第十一章 デストロイドの力

五課

楽しい休日を過ごした次の日。

大きなモニターがあるメインルームに四人は来ていた。何が起こつてもすぐに向かえるように、準備は万全の様子でソファアに座りコーヒーを飲んでいた。

そこでは数人のオペレーターの女性がコンピューターをカタカタとかまっっている。

三十分は経つただろうか、その時 オペレーターの女性が声を荒げる。

「マイカ隊長、リーナ隊長。大変です！」

「どうしたの？」

マイカが立ち上がる。

「グレイダール地方の平野で、レヴォルノのメンバーと思われる六名と、管轄している二課の八名が戦闘中とのことです。どうやら、最後のルーイン・ストーンを見つけたらしく、持っていた人物には逃げられたようです！」

「戦闘状況は？」

「戦闘状況、モニターに出します！」

リーナの声で、カタカタとコンピューターをかまい、モニターに表れる。

そこでは、隊長であろう三人が、二人相手に苦戦していた。二課の、残りの五人は既に、戦闘できない様子で苦しんでいた。レヴォオルノの他の四人は、笑いながら戦闘を見ている。

「すぐに俺達が向かう！それまで粘れと伝える！」

アルスはオペレーターの女性に言うと、戦闘機が準備されている場所へと向かう。三人もアルスの後についていった。

平野に着くと、三人の隊長達はまだ頑張っていたがアルス達に気付くと、敵から距離をとり、後ろへ下がる。レヴォルノの六人も（以下A〜）それに気付き、アルス達の数メートル前まで来た。

「お前達がサディケル様の邪魔をするものか……。ここらで死んでもらうぞ！」

Aがそう言い武器を構えると、他も戦闘モードになった。

「さすがに敵しそっただけど、戦うしかないね！」

「いや、みんなは下がっててくれ。こんな所で時間を使う訳にはいかない。」

アルスはリーナを制する。それをマイカが驚く。

「さすがのアルスでも、独りじゃ無理だよ！」

「そうですよ、アルスさん！」

「心配するな。いいものを見せてやるよ！」

三人を宥めると、今度は、レヴォルノの六人に言う。

「一応、忠告しとく！死にたくなかったら今すぐ引け。」

それを聞いたA達は、心底笑う。

「おい！あの馬鹿は何言つてんだ？頭おかしくなったのか？」

「しかも、一人でやる気らしいぜ！」

全く聞く耳を持たないA達。

「はあ。全員、死がお望みか。しょうがない！」

アルスは、自分もっている魔力を解放した。物凄い程の魔力をアルスは持っていた。それをみた六人は顔色を変え、後ずさる。

「二代神龍、デストロイド！」

そう叫ぶと、アルスの体から光が放出され、空に巨大な玉となった。それが弾けると、そこには十メートルを超えるドラゴンが現れた。

そのドラゴンは、翼をたたみ、スーツと、アルスの隣に降りた。

「久しぶりだな。デストロイド！」

「ああ。それにしても四年前とは比べものにならない魔力だな！正直、驚いたよ。」

「まあ、あれからいろいろあったからな！それより…時が近い。」

「そうか。そのためのウォーミングアップか？」

「そんなとこだ。それより、あいつら全員死にたいらしい…。任せ
ていいか？」

「当然だ！」

デストロイドは高く飛び上がり、六人に向かって急降下する。必死に逃げるが、無駄な行為だった。

まず、一人目に噛みつき、身体を腰から千切る。上半身をペツと捨てると、二人目の首を長い爪で切り落とす。三人目は足で潰し、四人目は爪で串刺しに。残りの二人は遠くに逃げていたが、デストロイドは空高く飛んだ。そして、口を大きく空けると、魔力のレーザーを出した。それは、見事に二人に当たり、核爆弾並の爆発が起る。

デストロイドは直ぐにアルスの元に降り立った。

「こんなもんでいいか？」

「馬鹿…。やりすぎだ。あっ、そうだ！仲間を紹介するよ。右で唾然としているのがキルで、真ん中で唾然としているのがマイカ、左で唾然としているのがリーナだ。」

「ちよつとアルス！なによその紹介は！？」

「真つ先に、正気に戻ったマイカが怒る。」

「悪い、悪い。それで皆！こいつがデストロイドだ。」

デストロイドがコクツと礼をする。

「それにしても、凄いですね。これならサディケルも余裕ですね！キルは喜ぶが、デストロイドが口を割る。」

「そんな簡単にはいかん！やつも私と同じ二代神龍を従えているからな。必ず死闘になる！」

「でも、勝ってみせるさ」

アルスはデストロイドを戻すと、五課に戻ろう、と言って、二課の人達を戦闘機へ運び、戻って行った。

第十一章 デストロイドの力（後書き）

おはようございます。本当は、アルス達自身で戦わせようと思っていたのですが精神的に無理だったので、デストロイドに手伝ってもらいました。次は最終ステージの場所が判明します。いきなり出てくる建物で申し訳ありませんが、多めに見て下さい。では！

第十二章 重なる手

五課に戻ったアルス達は、二課の怪我人を治療室へ運ぶと、メイ
ンルームへ戻った。

「お疲れ様です。皆さん！」

オペレーター的女性が笑顔で話しかける。

「ありがと…と言って言っても、別に疲れてないんだけどね。」

「そうね。私達、何にもしてないから。」

マイカとリーナは苦笑い。

「でも、残るルーイン・ストーンは此处で保管している一つになり
ましたね…。」

キルはちよつと不安そうだ。

「ねえ、マイカ！そのルーイン・ストーン、私達が持ってた方がい
いんじゃない？」

マイカはリーナと顔を合わせる。

「それもそうね！レヴォルノが強行突破とかしてきた時でも守りや
すいし。」

リーナとマイカがルーイン・ストーンを貰いにクリスの所へ行こ
うとした時に通信が入った。

「アルスさん、本部より通信がきています！」

「本部から？繋いでくれ。」

「アルス君。聞こえるか？」

その声は、ランティスだった。

「はい。聞こえます。何かあったんですか？」

「サディケルの居場所が分かった！」

「本当ですか!?!」

アルスが驚く。

「本当じゃ。北西にあるマール地方の、サランガ砂漠にある、古代の塔、通称ファイナルタワーと呼ばれる建物があるんじゃが、どうしても開かなかった扉が開いていたんじゃ! 管轄の一課の隊長が調べに行ったが帰って来んかった。恐らくサディケルはそこにいるんじゃないろう。」

「そうですね。そこで間違いないでしょう。今から向かいます!」

「アルス君!... 任せたぞ!」

「ああ!」

本部と通信が終わった時、

「たっ、大変です。クリス支部隊長が、ルーイン・ストーンを持って出ていかれました。」

一人の隊員が慌てて報告をする。

「なんですって! クリス支部隊長が? まさか、クリス支部隊長はレヴォルノの一員...?」

「うん。このタイミングで持って出たならその可能性が高いよ! リーナの考えに、マイカも同感する。」

「そんな...。どうしましょう! アルスさん!?!」

「奴が何であろうと、行き先は一つ。ファイナルタワー!」

みんな、これが最後の戦いになる。レヴォルノの残りの奴らも集まってるはず。命の保証は出来ない! だから、今一度考えてくれ。行くか、残るかを。」

キルが答えを出す。

「アルスさん...。僕はアルスさんの相棒ですよ! 行きますよ、僕は。」

続いてマイカも、

「私も、何かの役に立ちたい！いくよ、私も。」

最後に、リーナも、

「クルス支部隊長がレヴォルノなら、私達にも責任はある。私も行きます。」

アルスは大きく頷くと、口を開く。

「たしかレヴォルノのメンバーはサディケルを抜けば、十人。クリスがそうなら待ち構えているのは三人。俺たちならなんとかなる！」

「必ず、勝ちましょう。」

キルが手を前に出す。

「人類の未来を守るために。」

マイカも手を重ねる。

「また四人で、遊びに行こうね。」

リーナも重ねる。

「じゃあ行こう！人類の滅亡を賭けた最後の戦いに！」

アルスも手を重ねた。

第十二章 重なる手（後書き）

こんにちは。十二章まで来てしまいました。もうすぐですね！さて、ここで判明しました。最後の舞台ファイナルタワー！そこでこの物語も終止符を打つ訳です。次からは苦手な戦闘が続きます。わかりずらいかもしれませんが精一杯書いていきます。ここまで読んで下さった皆さんには、最後まで読んで頂きたいと思っております。では！

第十三章 キルVSジェルノー

ファイナルタワーへ着いた四人はその長い塔を見上げた。

「コレが…ファイナルタワー！」

かなり大きく、かなり高くまでそびえ立っている塔を見て、アルスは驚愕する。

「行こう！」

アルス達の中へ入ると、そこは古代遺跡の時と類似して、青と白の、光の空間だった。

中は思ったより単純な造りで、一つの部屋は何もないスペース。奥に続く通路に上へと登る階段があるだけであった。

何もないスペースの部屋には、いきなりにも人が立っていた。その男が言葉を発する。

「ようこそ、皆さん。僕はレヴォルノの一人、ジェルノーです。」

にこやかに話す、まだ少年といった感じのジェルノーは四人に話しかけた。

「サディケルはどこだ!？」

「サディケル様なら、この塔の屋上にいますよ。さつきクリスさんも登って行きましたし、…果たして間に合いますかねえ。」

「間に合わせるさ！」

アルスが剣を抜き戦闘体制に入る。…が、キルに止められる。

「ここで時間を使う訳にはいきません。ここは僕に任せて、三人は先に行つて下さい。」

一歩前へ出るキル。

「…わかった。屋上で待つてる。」

三人はキルに任せて奥の階段へと走って行った。それを止めようとしてもしないジェルノー。

「いいんですか？止めようとししないで。」

「アハハ、上にも二人メンバーがいますからねえ。彼らにも働いてもらわないと……。」

「その余裕、後悔しますよ！ファイアーボール！」

いつもより大きいファイアーボールがジェルノーに向かっていく。ジェルノーは笑顔で横にかわし、

「ナイトスケルトン」

と言うと、骸骨の騎士が現れる。

「くっ、召喚魔法！？」

スケルトンはキルに狙いを定め、走る。

「ウインドスラッシュャー！」

キルの出した風は、スケルトンにぶつかると、風の刃となって切り刻む。スケルトン消滅し、尚も風はジェルノーに向かう。

「へえ！なら、トルネード」

同じ風属性の竜巻は、キルの風を呑み込んだ。

ゴゴゴゴゴゴゴ！

徐々に、スピードもパワーも強くなりキルに近づく。

「クソ、避けるしかない！」

キルはとつさに、風に当たらない位置に回避するが、竜巻の風圧は予想以上であった。

ドガッ！

「うぐっ、くうっ！」

風圧で飛ばされ、壁に背中から激突するキル。

「アースグラウンド」

倒れ込むキルに、追い討ちをかけるジェルノー。地面から、尖った岩が次々とキルに向かう。

「アイスエッジ！」

苦しみながらも魔法を唱え、足元まで来ていた尖った岩を、氷の刃が切断していく。

危機一髪、と思ったが切断した筈の一つが再生し、キルの脇腹を

かする。

「ぐあ！」

脇腹を抑え、安全圏な場所へ何とか避難する。

「この程度かあ。なら上の二人も大丈夫だなあ」

笑みを浮かべる余裕のジェルノー。

「ハア、ハア。僕を…あまりなめないで下さいよ。僕は、ブラックリベラルの一人。」

「へえ、あのブラックリベラルねえ。」

「次の攻撃に、全ての魔力を込めます。それで立っていることが出来れば、僕の負けです！」

「面白い。見せてもらおうかな！」

キルは精神を集中させて魔力を込める。その強さを感じ取ったのかジェルノーの顔つきが変わる。

「なっ、これは…マズイ。ダークデーモン！」

ジェルノーも、切り札であろう召喚魔法を唱える。

「行きますよ。サウザンドライト！」

眩いほどの光が部屋全体を包み込むと、一気に弾け飛ぶ。

バシューーン

目を瞑るほどの光、響き渡る乾いた音。これが消えた時には、召喚した悪魔は消え、ジェルノーも仰向けに倒れていた。

「ハア、ハア、ハア。…勝った！」

「ばか…な…」

キルはジェルノーに近づく。

「あなた達は、僕等を甘く見すぎている。あなたが幾ら強くても…

現に僕は勝つことが出来た。そして、上に行った三人は、僕よりも強い！」

「…そ…ん…な…」

そのままジェルノーは喋ることはなかった。

「イテテテ、僕も急がないと…。」

キルは、脇腹を押さえ階段を登りはじめた。

第十三章 キルVSジェルノー（後書き）

こんにちは。ついに始まりました、最後の戦い。まずは、キルが勝ちました。戦闘シーンを書くのは難しいです。わからないところだらけだと思うので、自分で大ざっぱに想像しながら読んでいってほしいです。次は、リーナが登場します。果たして勝つことが出来るのか（笑）。では！

第十四章 リーナVSロジャー

キルと別れ、階段を登る三人。

「キル一人で大丈夫かなあ…?」

不安そうにマイカが言う。

「大丈夫さ! あいつはああ見えて、強い魔法を持つてるからな! それより、今度はこっちの身を心配する番だな。」

アルスがそう言っ止まると、ジェルノーと同じように、部屋の中央で待ちかまえている大柄の男がいた。

「ジェルノーがやられたか…。いや、お前達も一人少ないと言うことは、一対一を望んだか…。あのガキ! 面倒を押し付けやがって!」
「そこを通してくれない?」

リーナが相手の答えを知っているかのように大剣を構える。

「笑わしてくれる。私はレヴォルノのメンバー、ロジャー。三人まとめて相手してやる!」

同じくロジャーも大剣を構える。

「その必要はないわ。あなたは私一人で充分よ。アルス君、マイカ。先に行つて!」

アルスとマイカは頷くと、駆け出した。

「フン! まあいい。同じ大剣同士、勝負をつけようか!」

「あなたに私が倒せるかしら?」

「ハツハツハ! いい度胸だ。私はお前より力もある。そして…スピードもな!」

ロジャーはあつという間にリーナの懐まで来た。

「は、早い!」

リーナはかるうじてロジャーの太刀を避けると、すかさず斬りつ

ける。しかし、ロジャーは速いスピードでかわす。すぐにリーナの背後を取ると、大きく振り下ろす。

ドガアアン

地面には大きな亀裂が入るが、リーナには当たらず、姿は前方にあった。

「ほう。これを避けたのはお前が初めてだよ。」

「悪いけど、あなたよりもっと速いのと戦ったことがあるのよ。それに、その時に教えて貰ったわ。目で追えないなら、気配を追えてね！」

リーナは剣に魔力を送った。

「ライトニングバスター」

大剣から、強大なレーザーが発射される。

「フン！こんなもの……。クロスウェイブ！」

ロジャーは、大剣を十字に振ると、クロスした斬撃が飛ぶ。レーザーは四方に別れ、ロジャーに当たることはなかった。

しかし、リーナもこのぐらいは予想しており、レーザーを撃ち終わると同時に、ロジャーの方へ走っていた。

それに気づいたロジャーだったが、リーナはすでに斬りかかっていた。

「ちっ！！」

舌打ちするロジャーは、持ち前の速さを最大限に活用し、難を逃れる。しかし、頬には多少の切り傷が…。

「きつさまぁー！私に傷をつけたなぁぁ！」

「あら、随分女々しい事を言うのね！そんな大柄な体なのに。」

「ゆ……るっさぁぁんぞぉ！」

ロジャーは怒れ狂ったように、魔力を暴走させ、一気に、リーナ

に斬りかかった。それを大剣で受け止めるが、力が違いすぎた。大剣を高く弾かれ、無防備になったリーナを斬りつける。

リーナはバックステップで上手くかわす。

「剣がないと、扱いにくいんだけど…、ダイヤモンドクロス！」

リーナは手のひらをロジャーに向け、魔法攻撃をする。

ロジャーの前後左右の足元から、氷の氷柱が伸びる。

跳躍でかわすロジャーだが、一本がロジャーの右太股を貫く。

「ぐああ！」

「これでもうあのスピードは出せない。負けを認めなさい！」

ロジャーの怒りが頂点に達した。

「キサマアアア！！！殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す！！！！！！」

ロジャーはクロスウェイブを連発する。しかし、冷静なリーナはことごとくかわしていく。魔法を出そうとはしないリーナは、避ける一方だった。が、壁の隅に追いつめられ逃げ場を失う。

「これで終わりだああ！クロスウェイブウウ！！！！」

……………！？

「な…ぜ…、出ない！？体が…動かん！？」

信じられない顔をしているロジャーを尻目に、リーナは自分の大剣を拾う。

「馬鹿ね。それだけ魔力を暴走させて、魔法を無茶撃ちすれば、幾らあなたのレベルでも簡単に魔力を失う。魔力は自分の身体から出

るエネルギー。動かないのも当然。」

リーナはロジャーの前に立つ。

「助けて…くれ…。俺は…サディケルに…利用されただけなんだ…」

「この期に及んで命乞い？悪いけど、あなたは元からこうなる運命。この技、かなり魔力を使うんだけど、間抜けなあなたに見せてあげる。」

リーナは、自分の大剣を垂直に構えた。

「夢幻」

リーナは一瞬でロジャーの後ろに背中合わせに着地する。その速さは、ロジャーの上をいつていた。

「きさま……。何…を…した？」

何をしたのか分からないロジャーであったが、それは直ぐに分かることになった。

一瞬にしてロジャーの全身が切り刻まれ、大量の血を流し、その場で絶命した。

「夢幻は音を超える超高速剣。夢や幻を見ているかのように命を落とす、私の最強の技。もう、あなたには関係ないけどね。」

リーナはロジャーから目を離し、階段を登っていった。

第十四章 リーナVSロジャー（後書き）

こんばんわ！リーナ戦が終わりました。こちらはなんか余裕で勝ちましたね。自分で書いておいて、リーナの強さに惚れました。次はマイカの登場です！では！

第十五章 マイカVSフィリア

アルスとマイカは、かなり上まで来ていた。きつと屋上に近い、
と想像していた時、

「！！マジックシールド。」

マイカが何かを感じ、シールドをはる。そこに黒い魔法の玉が当
たり消滅。前には、一人の女性が立っていた。

「今度は私の番ね！アルス、先に行つて！」

「悪い。任せた！」

アルスは一人で上へ向かう。

「さて…、いきなりとは随分卑怯ね！」

「さすがね。あんなに早く気付くなんて…。」

露出度の高いドレスを着た女がそう言いながら近づいてくる。武
器は持っていない。キルと戦った少年と同じように魔法を主体とす
るらしい。

「そんなドレスで戦うつもり？」

マイカが銃を出す。

「心配しないで！私は援護専門だから…。デイオン！」

すると、女性の隣に、巨大なモンスターが現れる。遺跡で戦った
最初のモンスターと同じ類だが、その二倍は大きい。

「なるほど！そいつが接近戦で戦うって訳ね。」

「そういうことよ。一階にいた少年も召喚魔法を使ったと思うけど、
それは私が教えたのよ。」

「悪いけど、私は見てないわ。今頃は死んでるわね。」

「別に構わないわ、あんな少年。私は、レヴォルノの一人、フィリ
ア。私の闇魔法とデイオンの連携は、最強よ！」

「そう。悪いけどそんなに時間は無いの！早めに終わらせてもらう

わ！」

「フフ。どんなに足掻いても無駄よ。サディケル様には誰も勝てないわ。…ダークミスト！」

あたり一面が黒い霧に包まれ、視界が無くなる。

「何も見えないでしょう？でも、ディオンはあなたの居場所が匂いでわかる。さあディオ。あの女を殺しなさい！」

「ガウウウ。」

マイカはディオンがこっちに走って来るのを感じた。

「これで勝ったつもり？エクステインサークル！」

「馬鹿ね。どんな魔法を使っても無駄よ。」

バチーン

雷の落ちたような強烈な音がする。

「キャウウウン！」

うめき声を発したのはディオンの方だった。

「ディオーン！？何があつたの！？」

慌てて、黒い霧を消すフィリア。霧も薄れて、視界も明るくなつた時にフィリアが見たものは、自分の後ろまで飛ばされ、動かないディオーン。そして、初めの位置から全く変わらず立っているマイカ。マイカの体の周りをくるくる廻っている魔法の輪。例えるなら土星のような感じだ。

「この技は、私に触れようとした時に現れる完璧な防御魔法。残念だったわね。そいつ、かなりの勢いで来たから、その分ダメージも大きかったみたい。」

「くっ！ディオーン！！」

フィリアはディオーンに駆け寄りうつとする。

「エクスプロージョン！」

マイカの銃から出てきた赤い巨大な丸い魔法。しかし、その中は空洞のようだ。その魔法は、フィリアに当たった、と思ったら、丸い魔法の中に閉じ込められるだけであった。

「何？これは！？出して！」

フィリアはドンドン、と叩くが全く壊れる気配はない。それにマイカが近づく。

「どうやら…私が一番楽な戦闘だったみたいね。あなたなんて、そのモンスターがいなければ赤子同然よ！」

マイカは手を動かすと、巨大な魔法もフィリアを入れたまま、それに合わせ動いていく。それを天井高くに上げると、

「サヨウナラ。」

と、言つて、指をパチンツ！とならす。すると、魔法の中で何十回もの爆発が起こる。逃げ場のないフィリアにはもう成すべきことはなかった。

その魔法を解除すると、フィリアの姿はなくなっていた。

ふう。と息を吐き、階段を登ろうとするが、フラツと倒れる。

しかし、地面に落ちることはなかった。

「大丈夫？マイカ。」

マイカを支えたのはリーナであった。

「リーナ…、うん。もう大丈夫！流石に大技二連続は疲れたよ。久々に使ったからね。」

「マイカ、エクスプロージョン使ったんだ。私も久し振りに大技使ったんだけど、それなりに使い慣れしとかないと、きついね。」

「てことは、リーナも夢幻使ったんだ！かわいそうな敵ね。」

「リーナさん、マイカさん。良かった…無事だったんですね！」

二人の会話を邪魔するようにキルが階段を登ってきた。

「キルも無事で良かったよ。その傷、大丈夫？」

マイカがキルの脇腹の血を見て言う。

「ええ。かすり傷です。」

「後は、アルス君に任せるしかないよね。」

リーナが階段の上に目をやる。

「そうですね……。でも、アルスさんなら大丈夫です。絶対に……。」

「うん。そう信じよう！私達も、どんな結果になっても、見届けるわよ。」

マイカの言葉に三人は顔を合わせ、一回頷くと階段を登って行った。

最後の戦いを見届けるために……。

第十五章 マイカVSファイリア（後書き）

おはようございます。一生懸命悩みながら書いた結果、最初に描いていた戦いとは全く違う感じになったのですが、まあこれはこれで良かったんじゃないでしょうか？さあ、マイカも余裕で勝ちました！なんかファイリア弱いんじゃないの？と思つた人もいるかもしれませんが、それは相手が悪かつただけです。マイカがあのエクステインサークルを持っていたせいなんです。キルが戦っていたら確実に負けています。次はついにアルスの出番です。どうなるのでしょうか？作者にもわかりません！それは、かなりの修正をしながら書かないといけないからです！もはや原作はストーリーの流れしか意味をなしていません！では！

「ハア、ハア。！ 見えた。あそこが屋上か！」

アルスが全力で階段を登っていると、その先に外の光が見えていた。アルスは一気に駆け上がった。

そこで見たものは、黒いケースを渡そうとしているクリスと、それを受け取るうとしているサディケルの姿。足元には、四つのルーン・ストーンが落ちていた。

「そこまでだ！クリス、サディケル！」

二人は声を出したアルスの方を振り向く。

「ほう。案外早かったね。レヴォルノの奴らも使えなかったな。いや、よく働いてくれた、と思うべきかな。なあクリス。」

サディケルは笑みを浮かべ、そう言う。

「クリス！お前は最初から俺達を裏切っていたのか！？」

「違う！！」

アルスの問いに、大声で否定をするクリス。

「コイツが俺の前に現れたのは、君の話聞いたすぐ後だ！！」

「じゃあ、なんで！？なんでサディケルに従う！？こいつは俺が倒すと言った筈だ！！それが信じられなかったのか！？」

「それも違う！！……君を信じてたさ。……でも！仕方なかった！妻と子供を……人質に捕られているんだ……。」

「なん……だつて……？……でもクリス。……その人質はもう……。」

「この世にはいないよ！」

「なん……ウグツ……！」

アルスの言葉をさえぎったサディケルは、剣をクリスに突き刺し

た。クリスの手から黒いケースが落ちる。剣を抜き、黒いケースを手取るサディケル。アルスはクリスに駆け寄る。

その時に、キル、マイカ、リーナが入って来た。

「これは…どういう事？」

マイカは状況がよくわかっていなかった。それはキルもリーナも一緒だった。黒いケースを手に持ち、笑っているサディケル。血を流し倒れているクリス。それを抱えるアルス。どうしたらそういう状況になるのかわからなかった。

「バカヤロウ。人質を捕られているからって、それを渡しても結果は同じなんだ……。」

「すまない。アルス…君。…妻と…子供さえ助けられれば…あとは、君がなんとか…してくれれば、心の…どこかで、思っていたんだ…。済まない…本当に、すま…ない……。」

そう言って、クリスは死んでいった。

「アルスさん…。一体、どういう事ですか？」

キルがアルスに聞く。

「こいつは…クリスはただ、妻と子供を助けようとしただけだったんだ！その為の行動は間違っているけど…、その思いだけで、一杯だったんだよ…。」

「そんな……！」

「クリス…支部隊長が。」

マイカとリーナは、今にも泣きそうだった。クリスを始めからレヴォルノのメンバーだと思ってしまった。その申し訳ない気持ちで一杯だった。

「ハハハハ！馬鹿な男だよ。私が人質を生かしておくわけないと、よく考えれば分かるものを！本当に」

「黙れ。」

アルスがゆつくり立ち上がる。

「クリスは多分、心のどこかではそう思っていた筈だ。でも！そうじゃないと……まだ生きていると！思いたかったんだ。」

「そう思いながらも、これを持ってきたなら、馬鹿としか思えんがな！」

「確かに、クリスの行動は馬鹿かもしれない。でも、人の心は持っていた！お前と違ってな……。」

サディケルは黒いケースを下に置くと、剣を構えた。

「フン。人の心だと！そんなもの遙か昔に忘れたな！」

「じゃあ身を持って思い出させてやるよ。この俺が……。人の苦しみ、怒りを！」

アルスも剣を抜いた。二人が見つめ合う。…風が吹きつける。キル、マイカ、リーナにも緊張が走る。

先に動いたのはアルス。一気に間合いを詰め、サディケルに斬りつける。それを剣で防ぎ、弾かされると、逆に斬りかかる。サディケルの剣がアルスの頬を掠るが、身体を回転して掠る程度に抑え、そのままの勢いでサディケルの左腕を斬りつけた。

そこまで深い傷にはならず、サディケルも構わずに、アルスの頭を狙って突きを出す。寸前であわすと、剣を振り下ろす。それを顔のまま受け止める。そのまま力の込め合いが続いたが、痺れを切らしたサディケルがアルスの体に蹴りを入れる。大きく後ろに跳ばされるアルスだが、上手く体制を整え、着地した。

「強くなったな、アルス。四年前とは別人だよ！」

「当たり前だ！俺は、お前を殺すため、平和を取り戻す為だけに生きてきた。今も、そしてこれからも！」

「こんなくだらん世界のどこがいい！？小さなことで争い、自分の事しか頭のないカスな人間共など消えるべきだ！！いじめや暴力、

恨みや不安などを無くすには、一度滅ぼすしか方法はない！そのための浄化だ！！なぜそれが分からない！」

「分かりたくねえよ。確かに人間は小さな生き物だ！簡単に争い、簡単に他人を傷つける。…でも、その中でも精一杯生きようとしている！精一杯未来を見つめている！不幸や不安は尽きないけどそれが人生だ！それが生きると言うことだ！お前にそれを壊す権利はない！！！」

「戯れ言だな。人間は滅びるべきなんだ！お前もな！デルドスラツシュ！」

サディケルの唱えた魔法は、回転しながら、一直線にアルスを捉える。

「ゼロライド！」

アルスもそれを魔法でかわす。

一直線に向かって来る魔法を、上から降ってくる光が包み込み、爆発が起こる。その煙の中を突っ切り、サディケルを切る。煙の中から突然現れたアルスに少し反応が遅れ、肩から腹にかけて切り傷をおう。しかし、これも掠った程度で、サディケルは後ろへ跳び距離をあける。それを狙ってアルスは魔法を唱える。

「グレムゾンサンダー！」

着地したサディケルに向かって、上から落ちてくる稲妻。それを再び後ろへ跳躍してかわそうとするサディケルに、

「させるか！エネミーロック！」

サディケルの足元に表れる魔法陣。それは、動きを止める魔法だった。しかし、サディケルはそれ以上の魔力を足に込め、解放する。だが、三秒でも動きを止められたのが、もう手遅れだった。稲妻はサディケルに命中する。

「ハア、ハア。やったか？」

煙が晴れた時、サディケルはまだ立っていた。…左腕を失った状

態で。

「ハアーハツハツ！やはり君は、あの時に殺しておくべきだったよ！」

「ああ。それがお前の、唯一の失敗だ！」

「…そうだな。だが、勝つのはこのサディケルだ！君はここで死ぬんだ！イフリード！」

サディケルは魔力を解放させ、身体から空へ光が集まる。そこに、真つ赤なドラゴンが現れる。

「イフリード！こいつを殺せ！」

「ほう、あのサディケルをここまで…
イフリードはアルスを見る。

「サディケル。お前は、何故俺が真実を知ったと思っている？」
「何！？」

「お前と一緒にだからだよ！デストロイド！」
アルスは同じように魔力を解放させ、空にドラゴンを出現させる。

「まっ、まさか！貴様も契約者だったのか？」

「そういうことだ！デストロイド！そいつは任せる！」

「了解した。…さて。」
デストロイドとイフリードは目を合わせる。

「久しいな、イフリードよ。」

「フン、三千年前は何も出来なかったお前が、あんな青年についていたとはな…。」

「…俺は、アルスを契約者として、誇りに思っている。あの男をここまで追い詰めるとはな。」

「私も驚いたよ！サディケルは三千年前の奴より遥かに強い。それをここまでするとは…。だが、本当にサディケルに勝てると思って

いるのか？」

「勝てるさ。アルスなら。それに、私もお前に勝たせて貰う。二千年前に私の契約者を殺したお前を！」

「やってみる！」

イフリードは長い爪でデストロイドを切りつける。デストロイドは翼を広げ、高く飛び、それを回避すると、口から、魔法弾を発射させる。それをサツとよけるイフリード。そしてすぐに、デストロイドの場所まで飛ぶと、爪を体に突き刺した。

「グアアア。…くっ！」

デストロイドも同じく爪を突き刺す。

「グウウウ！」

両者左右の爪を体に突き刺し、動けない中、イフリードがデストロイドの首に噛みつく。

「グアアアアアア！」

かなりのダメージを負うデストロイドは力を振り絞り、イフリードの体を、翼で叩き落とした。イフリードも途中で体制を整え、デストロイドの高さまで飛び上がる。両者五十メートルの距離をあけ、睨み合う。

「次で、終わりにしよう。」

そう言ったのはイフリード。

「そうだな…。勝った方でこの星の運命が決まる、と言っても過言ではないな」

「お前のその首の傷は深い。どっちが勝つかは解りきったこと！」

そこで、両者一斉に口から魔法のエネルギーを吐く。大きさ、強さは全くの五分五分。それがほぼ真ん中でぶつかり合う。しかし、首にハンデを抱えるデストロイドが徐々に押され始めていた。

一方、地上でも二人の戦いは続いていた。

片腕となったデストロイドに、最初は押していたアルスだったが、本気になったサディケルのスピードについていくことが出来なかった。

そのスピードは、遺跡で戦ったA001より速く、攻撃も不規則だった。感覚で感じ、避けることで一杯だったアルスも、徐々に切り傷が増え、全身が真っ赤に染まっていた。

（くそ、このままじゃ殺られる。どうする……。これしかない！）
一つの考えを出したアルスは避けながらその時を待った。

（今だ！）

ブシュッ。

サディケルが姿を見せた。アルスの脇腹に剣を突き刺したまま。

アルスはその貫通した剣の先を左手で強く握り締めていた。アルスの足下には、身体からか、手からかわからないが、血が大量に垂れていた。

「やっと捕まえたぞ、サディケル。」

アルスは右手の剣を逆手に持つと、同じようにサディケルの腹に突き刺した。

両者苦しみながら剣を抜くと、その場に倒れ込む。

「アルスー！！」

「来るなあ！…まだ、終わっていない！」

駆け寄ろうとするマイカを止めるアルス。

サディケルとアルスは、剣を支えに起きあがる。

サディケルは苦しそうに、何もできないでいたが、アルスは魔法

を唱えた。

「ゴフツ、…サンダーアロー」

雷の矢を投げ飛ばすアルスをみて、構えるサディケルだったが、矢は遙か頭上、見当違いの方向へ向かっていった。

「ふっ、その怪我じゃ…ろくにコントロールもつけれないか。」

苦しそうに笑うサディケルだったが、それにアルスも笑い返す。

「仲間つてもんは…助け合う…ものだ。」

「何…？ま、まさか！？」

サディケルは矢の飛んでいった方向を見上げる。

空では、まだ魔力エネルギーがぶつかり合っていたが、デストロイドがかなり押されていた。誰の目からも、勝敗は明らかだった。

…が、下から飛んできた雷の矢が、イフリードの体に突き刺さる。

「グッ、あのガキか！」

「デストロイドオオ！！」

下から、聞き慣れた声が聞こえてきた。

「恩にきる。アルス…。」

デストロイドは最後の力を振り絞り、魔力エネルギーを増大させた。イフリードは集中力と視線を切ってしまったため、気付いた時にもう手遅れだった。

押されていたデストロイドは、それを増大させたエネルギーで、一気に押し返すと、そのままイフリードに直撃する。

「クツツソオーー！この私ガアア…。」

そこで、イフリードは完全に消え去った。

「バツ…、バカなあ！…キサマ…よくも…！」

「サディケル…。残りは…俺達だけだ。…決着をつけようか！」

不適に笑うアルス。

それを見て、サディケルは感じた。次の一撃で、勝負に決着をつけることを。

「ああ。そう、しようか。」

アルスとサディケルはそれぞれ剣を構える。

どちらもボロボロの状態。

下手な小細工は必要ない。

この剣での斬り合いにかける。

後は、精神力の勝負。

キル、マイカ、リーナも感じていた。次で終わることを。三人には、この数秒の静寂が、やたら永く感じられた。

その静寂の中、二人は一斉に走り出す。

キィィィィン

乾いた、剣のぶつかり合う音。

二人は背中合わせで停止している。

カラーン

サディケルの剣が真つ二つに折れ、先の部分が落ちる。
そのあとに、サディケル自身が倒れ込む。

「…か、勝った。…アルスさんが勝った！」

「やったよお。かったよお！」

「アルス君が、かったんだあ。」

三人が走ってアルスに近づく！マイカとリーナはすでに泣いている。

「アルスさあん！」

「イテテテ！イテーよキル！」

抱きつくキルを、振りほどくアルス。

「信じてたよお、アルスウ」

「さすがです…。無事で…よかつ…たよ」

マイカとリーナも泣きながらアルスを見る。

「…泣くなよ。二人共…。」

アルスが二人に微笑む。

「おれ…が…負けた…のか…。」

サディケルが呟く。

それを見たアルスは、ゆっくりとサディケルに近づく。

「サディケル…。お前の野望も、ここまでだ。」

「その…ようだ。この勝負は…、四年前に…勝敗…は、決まっていたのかもしれない。…アルス…もつと…早くに、子供のころに…お前に…出会って…おきたかつ…た…。」

サディケルの死によって、人類の滅亡を賭けた戦いは、幕を閉じた。

こんにちは。ついに終わりました。アルスVSサディケル！頑張りました。遺跡に次ぐ長さになりました。さあ、このサディケルですが、話の中で少し感づいた人もいるかも知れませんが、不幸な男なんです。小さな村で生まれたサディケルは、小さな時からイジメられ、唯一親切に接してくれた親を村の人に殺されました。当時十五才の時です。サディケルは村人を全員殺しました。その時から少しずつ人を恨んで行きました。都心に出てきたサディケルは、その思いを一層高めていきました。そして、ある日、イフリードに出会い、人類の浄化を決心した、ということでした。次の話は、戦いの終わった直後の話です。では！

第十七章 絶望の終わりと希望の悲しみ

サデイケルの死を見届けた四人。アルスは青く、どこまでも続く空を眺めていた。

その視界に、デストロイドが入る。

「デストロイド、お前は大丈夫か？」

その声でアルスの隣に降りてくる。

「アルスよりはマシだ！」

「ハハ、そりやそうだな……。」

「それにしても……よく倒したな。この男を……。」

「……ああ。でも、最後の言葉が引つかかるんだ。……もしかしたら、こいつもクリスと一緒に、気付いていたのかもかもしれない。自分のしていることを……。」

「それでも、今更引き返せない……、てどこだったんでしょうか？」

アルスの言葉をキルが遮る。

「かもしれない……な。実際のところ、最後の攻撃の時、本気で俺を斬りつけようって感じじゃなかった。」

「心のどこかで、自分が死ぬことを望んでいたのかもかもしれないね。」

マイカが付け加える。

「でも彼は多くの悲しみ、憎しみをいろんな人に与えた。まるで自分の気持ちを味わえ、というように……。」

リーナも静かに咳く。

「奴も、独りじゃさみしかったのかもかもしれない。誰か一人でもそばにいてくれる人がいれば……こんなことにはならなかったかもしれないな。」

「お前達は、本当に良い奴等だな！ここまでやった奴を許すなんて。」

「別に許した訳じゃない。サディケルのしたことは、何があっても許されない。俺だってまだ奴を憎んでいる。…でも、少しはサディケルの気持ちを解ってやっても、いいんじゃないか…って思っただけだ。」

…それより、お前はこれからどうするんだ？」

「…わからん。かなりお前といたから、考えてなかった。」
「…そうか。」

「このまま、アルスさんといればいいじゃないですか？」

「…それは出来ないんだ。」

「……………」

アルスの言葉に、黙るデストロイド。

「????？」

「そんな事より、もう帰りましょ！」

「そうね。全て終わったんだし！」

マイカとリーナが促す。

「そうですね！多分五課の皆さんが、盛大なパーティーでもしてくれそうですね！」

キルは、楽しそうに二人の元に駆け寄る。だが、アルスは動こうとはしない。

「アルスさん？行きますよ！」

三人がアルスを見る。

「……………まだ、終わっていないんだ…。」

三人に背中を向けたままそう呟く。

「アルス…さん？」

「アルスがゆっくり三人の方に振り向く。
『！！！！』」

三人は驚く。こんなに悲しそうなアルスの笑顔を、…今まで一度も見たことはなかった。

「アル…ス…？」

「エネミーロック」

三人の足元に魔法陣が浮かびあがる。

「これ…は、一体…なんのつもりなの…？」

リーナが動揺しながら聞く。

アルスは再び、背を向けると、ルーイン・ストーンが転がっている場所へ歩く。

「終わりなんてないんだ…。この、ルーイン・ストーンがある限り！」

アルスは、ルーイン・ストーンを一つ掴むと、それを握り締めた。

「アルス…、それは仕方ないよ。その石は…壊すことは出来ないんだから…。」

マイカが言った。

「もし…あるとしたら？もし…遥か昔から、確かな言い伝えがあるとしたら？皆は…どうするっ？」

声が震えていた。

皆気付いた。

あの…、あのアルスが、

泣いている。

「あ…る…す…？それは…どういこと？」
マイカの声も震える。

「ルーイン・ルーラアの…現れる次元の中で、ルーイン・ストーンを…体の中に封印し、…魔力を暴走させて、爆発させれば…この石も…消滅すると、言われている。」

空気が凍りつく。アルスのしたいこと、考えていることが、
…三人に伝わった。

自然と、涙が零れる。
戦いの終わりに流した涙とは違い…冷たく、悲しみの涙が…。

アルスが続ける。

「こんなものがあるから。こんな石があるから！…争いが起こるんだ。悲しみが増えるんだ。

この先何年後、何十年後、何百年後、何千年後！…必ず今と同じ争いが起こる。必ず人類が滅ぶ運命が訪れる！…そんなこと…あつてはならないんだ！この世界に！…こんな物…あつてはいけないんだ。」

アルスが振り向く。

その目からは、大粒の涙が、次々と溢れていた。

「わかってくれとは言わない。……ただ、許して欲しい……。」

アルスは空を見上げる。

（こんな筈じゃなかったのに……どうして、涙が止まらないんだろう）

「アルス……さん。僕達は……僕達はコンビでしょ……？僕も……連れて行って……くださいよお」

泣きながら、足が崩れ落ちるキル。

「キル……俺は、お前に会うまで復讐のことで一杯だった。……けど、キルと出会ってからは、楽しかった。……復讐のことも、辛かった過去も……お前といれば忘れられた。……俺は、キルに何度も救われた。だから……お前は生きるんだ。これから先、多くの人達を……幸せにするんだ。それが、……俺が、お前に依頼する……ブラックリベラル初代としての、最後の仕事だ。」

「なん……で……なんで僕をひとりにするんですかああ！アルスさんが……いないなかで……僕ひとりでなにができるというんですかああ……！」

「お前はもう独りじゃないだろう……！……お前の隣には、俺以外の仲間がいるじゃねえか！」

「ウワアアアアアア……！」

キルは、もう泣くしかなかった。

改めて思った。五課に入ろう と言ったのも、僕の事を思っていたことだった。

マイカさん、リーナさんと仲良くなって笑っていたのも、僕に仲間が出来たからだった。

最初から、最後まで。僕のことを考えてくれていた。

僕は、なんて強くて、なんて大きな人と一緒にいたんだろう……。

「マイカ、リーナ…… 済まない。五課に入れなくて……。また、…… 四人で遊びに行けなくて。短い間だったけど…… 楽しかった。キルを…… よろしく…… 頼む。」

マイカとリーナは、もう、コクンコクン、と、頷く事しかできなかった。

それを見て、アルスはそっと、長年使ってきた自分の剣を、三人の前に置いた。

「デストロイド！お前にも…… 逢えて良かった。お前と契約できて…… 良かった。…… ありがとう！」

「私は…… お前にこの方法を教えたことを、後悔している。…… アルスは、私が見てきた中で…… 最高の奴だった。…… 私を、仲間として…… 見てくれた。…… お前のことは、この先、…… 何千年生きようが、絶対忘れん！」

デストロイドの目から、一筋の涙が落ちた。
涙があるのかわからないドラゴンから、一筋の涙が……。

アルスは、黒いケースを手にとった。
そして、皆の方を向いた。

「俺の命を、この星の未来に捧げる！キル！マイカ！リーナ！……後は、お前達が見守ってくれ！！じゃあ……お別れだ！！！」

アルスはケースの中からルーイン・ストーンを取り出し、他の四つのそばに置いた。

すると、石は光り出しその近くに、異次元の空間が出現した。
アルスはルーイン・ストーン全てを持ち、躊躇なく入っていった。

その三分後。異次元の空間は、静かに消えていった。アルスと、ルーイン・ストーンと共に。

そして、アルスの名前をさげぶ声が、どこまでも響いていった。
異次元にも、届くかのように……。

第十七章 絶望の終わりと希望の悲しみ（後書き）

こんにちは。悲しいお話になりましたが、最初からこれだけあったものですから……。アルスは始めからそうすることを望んでいたので、別に、サディケルが石を集めることに反対していたわけではないんです。だから、始めにルーイン・ストーンを五課から奪っても、自分で持たずに五課に返したわけです。そこにあればかならずサディケルが現れると思って。それでは、次が最終話です。では！

最終章 託された未来

ここリユースベルは平和な日常を送っていた。
そして、五課も…。

「マイカ隊長！」

「あら、ミナ！どうしたの？」

「キル隊長を見ませんでしたか？」

「キル？今日は見てないけど…どうしたの？」

「今日、新しい魔法を覚えてくれるって言ってたのにい。どこにもいないんだもん！」

「そうだったの。あつ、リーナ！キル見なかった？」

「キル？フッフ、約束を果たしに行ったわ。もう少しで帰って来るんじゃないかな。」

「あつ、マイカさん、リーナさん。ミナちゃんまで！何かあったんですか？」

「噂をすれば、戻ってきたキル。今のところ、そこまで変わってないようだ。」

「何かあったじゃないわよ！ミナに魔法教えるんでしょ？」

「あ！忘れてた。じゃあ行こうか、ミナちゃん！」

「うん！」

嬉しそうな顔をするミナ。

「あっ！マイカさん、リーナさん。明日ですからね！忘れないで下さいよ！」

そう言っつて消えていった。

「ハア。ミナの約束は忘れてるのに、肝心なところは覚えてるわね。」
「フフ、そうね。…それにしても、早いものね。明日で…あれから丁度、一年なんて」

とある喫茶店。

カランカラン

「いらつしゃい！」

店には、珍しく二人組みの男性客。

「あの、キルさんに言われて来たんですけど…」

それに、ニヤツと笑うカーフ。

「座んな！」

完

最終章 託された未来（後書き）

ここまで読んでいただき本当にありがとうございます。分かりにくい部分も、多々あったと思います。まだまだ未熟者なので、もっと、勉強したいと思います。しかし、何を言われようと、このルーイン・ストーンは僕にとって一生の宝物になると 생각합니다。それでは、またどこかでお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2588c/>

ルーイン・ストーン

2010年10月8日15時06分発行